食農総合研究所研究成果　第９号

農業体験農園の可能性を考える

（2018 年度都市農村共生研究ユニット研究セミナー記録）

２０１８年１２月

和歌山大学　食農総合研究所

食農総合研究所研究成果　第９号

農業体験農園の可能性を考える

都市農業に果たす農業体験農園の役割と課題　　藤井　至

農業体験農園に対するＪＡわかやまの取り組み　　池田　信義

和歌山大学　食農総合研究所

２０１８年１２月

はじめに

都市農業は「新鮮で安全な農産物の供給」以外に、「身近な農業体験・交流の場の提供」、「災害時の防災空間の確保」、「やすらぎや潤いをもたらす緑地空間の提供」、「国土・環境の保全」、「都市住民の農業への理解の醸成」といった多様な機能・役割を果たしており、安定的な継続が求められている。

本資料は、2018 年 7 月 28 日に岸和田市立浪切ホールにおいて、地域農林経済学会近畿支部大会との共同開催で行った都市農村共生研究ユニット研究セミナーのうち、地域セッションの内容を取りまとめたものである。同セッションでは、近年、都市農業振興策の一つとして注目されている農業体験農園を取り上げ、その展開の現状と今後の可能性について討議した。

第 1 報告「都市農業に果たす農業体験農園の役割と課題」（藤井至、和歌山大学）では、農業体験農園の仕組みや全国的な広がりなどが紹介され、続いて、東京都練馬区で実施された農園主や利用者への調査結果をもとに農業経営面、利用者との交流面からみた農業体験農園の果たす役割について報告が行われた。そして最後に、これらの調査結果を総括するとともに今後の展開可能性が示された。

第 2 報告「農業体験農園に対する JA わかやまの取り組み」（池田信義、JA わかやま）では、農業体験農園に関して JA わかやまが和歌山大学観光学部藤田研究室との共同研究で取り組んできた経過が紹介された後、和歌山市 3 農園と海南市 1 農園の開園状況、経営者・利用者の実態、農業体験農園の成果などが報告された。JA わかやまでは今後も農業体験農園の開園をサポートし、市民との交流面の強化を進めるとしている。

台風 12 号が近畿地方に近づくなかでの開催であったが、大学・研究機関の研究者、学生、大学院生、JA 関係者など 26 名の参加があり、活発な意見交換が行われた。今回取り上げた「農業体験農園」が、都市農業の振興だけにとどまらず、多くの地域への普及が考えられ、行政、JA、研究など関係者からの関心が高いことから、本セッションでの報告や質疑応答の内容を研究資料として発刊した。

地域セッションでの話題提供ならびに本資料の発刊を快くお引き受けいただいた藤井至氏、池田信義氏に御礼申し上げたい。今回の都市農村共生研究ユニット研究セミナーの開催にあたり、和歌山大学岸和田サテライトの大坪史人氏には大変お世話になった。また、本資料を作成するにあたり岸上美樹子さんにご協力いただいた。以上、記して感謝の意を表したい。

2018 年 12 月

和歌山大学　食農総合研究所　辻　和良
（都市農村共生研究ユニットリーダー）

目　　次

趣旨説明 ---------- 1

都市農業に果たす農業体験農園の役割と課題 ---------- 3

付属資料 ---------- 15

農業体験農園に対するＪＡわかやまの取り組み ---------- 29

付属資料 ---------- 35

質疑応答 ---------- 49

趣旨説明

座　長　　和歌山大学　食農総合研究所
岸上　光克

ご紹介いただきました和歌山大学食農総合研究所の岸上と申します。よろしくお願いいたします。

今回の地域セッションのテーマを考える際に、和歌山大学が事務局ですので「園芸産地」、「ウメ」や「ミカン」、「中山間地域」といったキーワードも出たのですが、和歌山大学が具体的に地域で取り組んでいるホットな話題を取り上げた方がいいのではないか、ということで「農業体験農園」を地域セッションのテーマに設定させていただきました。そのなかで「都市農業に果たす農業体験農園の役割と課題」を和歌山大学の藤井さんに、また、「農業体験農園に対する JA わかやまの取り組み」を JA わかやまの池田さんにご報告をお願いしました。

といいますのは、ちょうど平成 30 年度の前 3 年間（平成 27 年度～29 年度）、JA わかやまと和歌山大学観光学部で、この農業体験農園に関する共同研究を行ってきました。この共同研究のなかで、東京都練馬区の農業体験農園の視察を行ったり、その視察を通じて JA わかやま管内で農業体験農園を新たに開設するという取り組みを行ってきました。引き続き平成 30 年度からも、この共同研究を継続して行うこととなっています。

こうしたお話も含めまして、藤井さんには「農業体験農園とはどういうものなのか」を紹介いただきます。東京都練馬区で農園主の方々、加えて利用者の方々にアンケートをとって、「どういった意向があるのか」、「どういう効果があるのか」といったあたりの調査も行っています。それら調査に基づきまして JA わかやまの方では、具体的に農業体験農園を開設していますので、その開設の経緯であったり、現在の状況などを池田さんの方から報告いただきたいと思います。これらを踏まえまして、「これからの農業体験農園の可能性」を皆様と一緒に考えてみたいというのが、この地域セッションの趣旨でございます。

私だけが話していても発展性がございませんので、具体的なお話を藤井さんと池田さんの方からいただきたいと思います。

都市農業に果たす農業体験農園の役割と課題

和歌山大学　観光学部
藤井　至

はじめに

皆さんこんにちは。和歌山大学観光学部の藤井と申します。「都市農業に果たす農業体験農園の役割と課題」というテーマで報告をさせていただきます。

本日の報告の構成について、大体大きく４つに分けてお話をさせていただこうと考えていす（スライド 2)。まず１つめは、農業体験農園とはそもそもどういう取り組みを行っているのかということです。市民農園や区民農園とは違う仕組みで展開をしていますので、その違いの部分など全体のお話をしてから、先程、岸上先生の方からお話がありました東京都練馬区で行った調査の報告等を入れ込みながらお話をさせていただければと考えています。

農園主調査からみる農業体験農園の果たす役割ということで、今回こういった論文[1)]を配付しています。この論文の内容をかいつまんでお話をさせていただこうと考えているのが２つめです。

それから、これまでは園主側からみたので、次は実際に体験している利用者の方からのお話を３つめにしたいと考えています。３つめの利用者調査からみるところに関しましては、こちらの概要版[2)]を配付しています。こちらの内容を中心にお話をさせていただければと考えています。

これらの２つの話を受けて、最後に農業体験農園の今後の展開の可能性を紹介して、池田さんにバトンタッチしたいと考えています。

注：１）藤井至・稲葉修武・藤田武弘「農業経営・交流の両面からみた農業体験農園の役割－東京都練馬区農業体験農園を事例として－」、日本農業市場学会『農業市場研究』第 27 巻第 1 号、2016 年 6 月。

２）和歌山大学観光学部農山村再生ゼミナール『東京都練馬区体験農園利用者アンケート報告書【概要版】』、2017 年 1 月。

１　農業体験農園の仕組み

（1）農業体験農園とは

それでは内容に入らせていただきます。まず、農業体験農園といわれても、なかなかイメージが沸きにくいかと思いましたので、写真をみていただきながら話を進めていこうと思います。

１番初めの表紙のスライドも農業体験農園の風景です（スライド 1)。区画割がこのように縦に割られているのですが、非常に視覚的にも整然とした風景が広がっているというのが農業体験農園の特徴の１つだといわれます。市民農園とは違って、それぞれ農園主の方から指導された品目のみを作っていくのでこういった整然とした風景が広がっていきます。

こちらに年間約 30 品目程と書いています。それぞれ農園ごとに違いはありますが、春に 15～20 品目ぐらい、秋以降で 15～20 品目ぐらいの作物を作っていき、そういった野菜の栽培・収穫体験ができるというところが農業体験農園の１つの大きな特徴です（スライド 3)。

次に、農業体験農園で使う資材関係についてです。市民農園であれば基本的には自分たちで資材を調達しながら行っていくのですが、農業体験農園の場合は、基本的に農作業に使うクワとか、ジョウロとか、種苗、肥料、農薬に関しても、基本的には農園主である農家の方で調達をして、利用者の人はこれらの資材を使いながら活動するという形になっています。ですので、農園ごとにビニールハウスなどを作り、資材の置き場として利用するという形で運営されています（スライド 4)。

更にもう１つ農業体験農園の大きな特徴であるのは、こちらの風景をみてもらったら分かるのですが、園主による技術指導の講習会というものがあります（スライド 5)。赤い帽子の方が農園主の方ですが、周りに利用者の方がそれぞれ集まって、園主の人が見本区画のようなものを設定して「実際にこのように今日は作業して下さい」というのをみてもらってから、それぞれ利用者の方がバラバラに自分の区画の農作業を行うというようになっています。なかには紙の資料を配っている方もいらっしゃいますし、ホワイトボードに「今日やってもらうことは」という形で書いている方もいます。利用者は講習を受けて自分たちで作業に移るというような形でずっと取り組みがなされています。このように初心者の方でもそれなりの収穫量が採れるように、講習会で技術指導を行いながら運営されています。

もう１つ市民農園との大きな違いは、農業体験農園のなかでは交流会とか、収穫祭といったものが開催されていることです（スライド 6)。これは実際に交流会の時の風景です。それぞれ農園の利用者であってもなかなか同じタイミングで顔を合わせるという機会はなかったりしますので、そういったなかで利用者間のコミュニティを作ってもらおうと意図的にこのような会を催しています。こういったなかで新しいコミュニティが生まれたり、農園の管理も円滑に進んだりというメリットがあるといわれています。また、この辺はアンケート調査を踏まえながら詳しくお話をしていきます。

(2)農業体験農園の１年

このように基本的に農業体験農園の取り組み（スライド 7）といいますと、まず利用者の募集を始めてから、先程申しましたとおり、実際に農家が「どういった品目を作るか」等について作付計画を作成します。そして、計画の作成を行ってから利用者の決定をして、そして講習会を実施して、実際に「このように植えて下さい」とか、「このように日頃の管理をして下さい」と農家から説明します。それから各自利用者の方で作業に移っていくのですが、そういった作業の途中では先程写真でみたような交流会等を実施して「利用者間の関係を深めてもらう」、または「農園主との関係を深めてもらう」というようなプログラムを行っています。そして作物の収穫をして、栽培とか収穫の体験を楽しむ。そのようなことを 1 年間繰り返し、繰り返し行うことによって新しいコミュニティが生まれていくといった、ただ単に農業の体験をするということだけにとどまらない部分が農業体験農園の大きな特徴です。

(3)市民農園と農業体験農園

これまで市民農園と農業体験農園について写真をみながら違いを話してきたのですが、それを表にまとめたものがこちらになります（スライド 8)。配付している資料の方にも載せているのですが、市民農園と農業体験農園、大きな違いは主にこういったところにあると思います。

生産緑地で行っている場合は、買取申請で市民農園と農業体験農園によって差が出ている（市民農園の場合は生産緑地の指定から 30 年経過によるもの以外申請できないが、農業体験農園は申請可）というところであったり、相続税の納税猶予に関して（市民農園の場合は基本的に適用されないが、農業体験農園は適用可）も差が出てくるというところが特徴としてあります。

また、市民農園の場合は、作付計画は基本的に農園を利用する利用者の方が考えていくのですが、農業体験農園の場合はそうではなく農園主が作成するであったり、また、資材の準備も市民農園では利用者が準備しないといけないのですが、それも農業体験農園の場合は基本的に農園主の方が準備を行ったり、市民農園では基本的に栽培指導がないのですが、農業体験農園では栽培指導があるのでしっかりと技術を習得することができる、といったメリットがあります。

さらには農業理解の促進につながったり、先程から話をしているような交流会等で新しいコミュニティが生まれてきたり、また、何年も何年も継続して利用することによって、新しい担い手としてその利用者の方が実際に農業者となって活動していくといったようなところの可能性までも含めて、多くの意義を有しているのではないかと考えられています。

(4)全国に広がりつつある農業体験農園の取り組み

こういった形で農業体験農園は行われているのですが、それが全国的にどういう形で広がっているのかということをまとめたのがこのスライドです（スライド 9)。農業体験農園の取り組みは、1996 年東京都練馬区で誕生しています。このあと調査の報告を行うのですが､そういった先進的に取り組まれているところを事例にしながらお話を進めていきます。

農業体験農業の取り組みというのは、都市農業の税制面での優位性というところがありますので、都市を中心に展開されています。このため東京都が最も多く 92 農園が取り組みを導入していまして、中心的に展開されています。また、東京周辺の関東エリアでも 25 農園となっているのですが、もう１つ九州の方においても東京の練馬に追随する形で集中的に農業体験農園が展開しています。この右側は九州、福岡の体験農園ですが、周りが住宅地で囲まれたようなエリアで展開しているものもあれば、この左、これも福岡の農業体験農園の１つですが、かなり開かれたエリアのところで展開されていて、中山間地域のエリアでも展開されています。関東・九州を除いたその他の地域、今回報告いただきますが和歌山県を含めまして 12 農園で、全国で大体 140 農園ほどが開設されています。以下では、そのなかでも取り組みが成熟している東京都練馬区の事例を紹介しながら農業体験農園の果たす役割というところに焦点を当てていきたいと考えています。

(5)東京都練馬区の農業概要

東京都練馬区がどういった農業概要なのかということを大きくまとめ 3 点に集約しています（スライド 10)。

まず１つめは、都府県と同等あるいは上回るほどの充実した農業経営と書いていますが、販売農家率や販売金額 500 万円以上の農家率を都府県平均と比べてみますと、だいたい同等か、ケースによっては高い割合を示しているところが特徴としてあります。

２つめ、練馬区の農業経営実態調査についてみると、専業農家はかなり数が少なく 8 戸で、第 2 種兼業農家が最も多くを占めています。ですが、これは都市農業の特徴ともいえますが、当然不動産収入を農業経営とは別に持っていますので、その比重が大きくなっていて、統計上は第 2 種兼業農家としてカウントされています。しかし、それぞれ農業体験農園を経営している農業者の方の意識からいいますと、不動産経営を当然やってはいるのですが、基本的に 365 日農業を中心に行っているので、統計上は第 2 種兼業農家ですが、意識的には専業農家に近い形で農業経営をされている、というのが特徴としてあります。

３つめ、市場出荷型から直接販売型へのシフトと、更に少量多品目生産というところに移ってきているというのも大きな特徴であると思います。販売形態も 1987 年から 2016 年の違いをみると、1987 年段階では市場出荷が 500 戸近くあったのですが、それが 73 戸まで減少しています。逆に、朝市とかの直接販売関係の部分が 11 戸から 104 戸まで増加してきています。また、作付面積の上位 5 品目の割合をみると、1989 年段階では 68.6%を占め

ていたのですが、2016 年では 37.4%へと低下し、少量多品目生産にシフトをしてきています。

その一方で様々な課題にも当然直面していまして、総農家の減少率とか、販売農家の農地減少率は都府県よりも非常に高い割合になっています。やはり都市で展開していますので、転用条件が非常に整っているということもありまして、そういった特徴を示しています。ですが、練馬区においては、農業を重要な産業として位置付けながら、農業体験農園であったり、収穫体験農園であったり、また実際に練馬区で暮らす区民の方々に農業の重要性を啓発していく取り組みに非常に力を入れています。

(6)東京都練馬区における農園事業

そういったなかの１つで農業体験農園も行われているのですが、東京都練馬区での農業体験農園とその他の区民農園･市民農園の展開といったものをまとめた表がこちらです(スライド 11)。

やはり区民農園・市民農園の方が農業体験農園よりも先に展開されています。農業体験農園に絞ってお話をしていきますと、現在、東京都練馬区では 17 の農園が展開されています。調査を行った段階の総区画数は 1,813 区画ですが、最新のものをみると区画数がもう少し増えて、1,850 区画ぐらいが展開しています。1 区画当たりの面積が約 30 ㎡、利用期間は基本的に 1 年ですが、1 年間体験をした後に更新をすることが可能になっています。最大 5 年まで更新することが可能になっていますので、利用者のなかにはリピーターの方が多く存在しています。使用料につきましては、練馬区民以外で 5 万円、練馬区民の場合は 3 万 8 千円という形になっています。練馬区から練馬区民が利用している場合には農業者に対して区画利用者 1 名当たり 1 万 2 千円の補助が受けられることになっていますので、実際に農業体験農園を導入している農園主の方は、1 区画当たり 5 万円の利用料を受け取ることができるという形で展開がされています。指導者については農園主による指導が当然あります。

東京都練馬区における農業体験農園というのは、基本的に地域との共生を考えています。市民農園の場合ですと利用者の方がそれぞれ自由に作るということになってしまうので、なかなか農業者との接点が持てません。農業体験農園は、農業者と利用者が接点を持てるような形で農業を展開できないだろうかといったところであったり、また、安定した収入を得ながらであったり、労働の効率化を目指しながらといったところを考えながら生まれた市民参加型農業の１つの形態とされています。1996 年から展開を始めているのですが、当初は練馬区の農業者と、練馬区、東京都農業会議、JA 東京あおばの連携のなかで、色々試行錯誤しながら展開してきたという取り組みの経緯になっています。

練馬区の農業体験農園の特徴につきましては、大きく２つあげられます。まず１つめは練馬区の農業体験農園の園主ごとにそれぞれ園主会というのを作っていて、自分たちでの

活動の悩みとかが出てきたときにそれを共有したり、色々な自己啓発の会を作っているというところが特徴としてあげられています。練馬の方でこういった園主会の取り組みが始まっていったのですが、それがモデルケースとして取り上げられて、更に東京都とか全国においてもこういった園主会が展開されています。

もう１つは地域住民に知ってもらうということもありまして、地元 JA と連携しながら JA の農業祭において「農園区画の立毛品評会」と呼ばれているのですが、基本的にどれだけきれいに作っているのかといったところの評価会を実際に JA の農業祭において実施しています。このことによって、それぞれ利用者の方の意識向上と市民理解を図るといった取り組みが展開されています。ですので、市民農園・区民農園になりますと、それぞれそこを利用している方が満足ということだけにとどまるのですが、農業体験農園の取り組みには個々の農業経営の発展だけではなく、地域農業の発展といったところまで視野に入れながら取り組まれているといえます。

２ 農園主調査からみる農業体験農園の果たす役割

(1)東京都練馬区農業体験農園の運営状況

このように展開されている農業体験農園ですが、その運営の状況についてまとめたのがこの表になっています（スライド 12)。配付資料のほうにも入れていますが、スライドだと非常に細かくなりますのでお手元の資料をご覧になりながら話を聞いていただければと思います。

１番左、園主の年齢についてまとめています。P 農園の 33 歳から高齢の園主の方では I 農園の 78 歳まで農園主として活動しています。非常に幅広い年齢層の方が展開しています。また、練馬区のなかには、練馬地区と大泉地区、石神井地区といった 3 地区があり、それぞれ分散しながら展開しています。開設年についてみますと、1996 年から 1 年に 1 農園のペースで数を増やしていっています。

区画数をみていただきますと、平均 106 区画程が展開しているのですが、少ない区画だと 51 区画から多いところだと 160 区画展開しているところもあります。このように同じ地域で農業体験農園を展開しているのですが、様々な経営のやり方で展開していることが分かるかと思います。更に、農業経営の収入に占める農業体験農園の収入の割合というのをみていくと、少ないところでは 30%程ですが、多いところになると 95%、ほとんど全ての農業経営をこの農業体験農園の収入で賄っているというところもあったりするという特徴がみてとれるかと思います。

「現在の生産・販売状況」というところをみていただくと、基本的に少量多品目で生産しているところが基本になっていまして、また、販路についても、直売という販路をとっている方や、観光農園など、地域の方への直接販売を基本としている農家が中心になって

農業体験農園が展開されています。こうしたことから先程、練馬の農業の概要のところでお話ししましたが、そういった直売に移行している農家が農業体験農園を運営しているという特徴があります。基本的には園主の年齢は 50 代が中心で、総じて年齢層が低いといったことも特徴としてあげられます。

（2）農業経営面での効果

次に、ヒアリングのなかで「農業経営面での効果」についてまとめたものがこちらの表です（スライド 13）。

「農業経営面での魅力はどのようなところに感じていますか」というところで、収入や労働力、その他の部分で聞いているのですが、「収入面で農業体験農園は非常に魅力的です」といっている経営者もいれば、「労働力での貢献というところをみている」といった経営者の方もおられます。

また、後継者の欄をみていただきますと、いくつか○とか、◎とか書いていますが、「現在すでに後継者がいて、農業体験農園の経営も引き続き継承していくと考えている後継者がいる」場合は◎、○のところでは「現在後継者がいるのですが、農業体験農園の経営を継続していくかは、まだ不確定」なところです。次に、「まだ後継者として継いでいるわけではないのですが、将来的には後継者としてその農業経営を継ぐと考えているものがいる」というのが△。最後に※ですが、これは「後継者の年齢がまだ若い状況であったり、農園主の年齢が若いので該当しない」というところになっています。総じてみますと、後継者のある方が非常に多くいるということが特徴としてあげられます。

「農業体験農園の経営を始めたきっかけ」というところをみますと、「園主Ａ、Ｂの紹介」によって始めたというケースが多くあります。このＡ農園主とＢ農園主が中心になって展開していったのですが、そういった園主Ａ、Ｂからその仕組みを聞いて、自分の農園でも導入していきたいと考えたというのが非常に多いので、園主Ａと園主Ｂの果たした役割は非常に大きいといえます。また、きっかけのなかには「近隣住民への農業の理解促進」を目的として展開したというケースもあります。

先程から紹介しているように、「農業経営における収入面や労働面での魅力を非常に感じている」という特徴であったり、また、「労働配分」、「新規品目の導入」、「販売経路」など、導入後に経営変化がみられているケースもありました。最後に、農園経営を行っている半数以上の農家に後継者がいるというところも非常に大きな役割を果たしていると考えられました。

（3）交流面での効果

更にヒアリングを続けていき「交流面での効果」というのをまとめたのが、こちらの表になります（スライド 14）。

いくつか特徴をみていきますと、真ん中に「農園主催の行事」という欄があります。それぞれ先程紹介したような収穫祭や交流会といったものを実施しているのですが、それだけにとどまらず、料理教室を農園主催で行ったり、花火大会を農園主催で開いたり、ゴルフ大会を農園主催で開いたりといった、非常に多彩な行事を展開しています。また、１番左の欄に「講習会の回数」を入れていますが、非常に講習会の回数を充実させているということもありまして、それが多くのリピーターの確保につながっていると思います。

さらに、真ん中に「サポーターの有無」という項目があります。農業体験農園では 100 人以上を相手にしていますので、農園主１人で管理していくのが難しくなってきます。そういったなかで､農園利用者のベテランの方(農業体験農園を継続して利用されている方、または、農園主の方と非常に密に交流されている方）にお手伝いを頼んだりして、一緒に農業体験農園運営の円滑化を図っている農園が多くみられています。◎をつけているところは、実際に農園主の方が「あなた、サポーターとして色々お手伝いお願いします」と利用者を指名している農園､別に農園主の方からお願いしているわけではないですけれども、「色々自分が園主のサポートをやっています」という方がいる農園を○という形で示しています。そういったものをみていくと、半数以上の農園においてサポーターが存在していることが調査のなかから明らかになりました。

また､「特記事項」その他のところをみていくと、園主間で実際にそれぞれの農園をみに行って、どのような農園の運営状況になっているのかということを確認したり、さらに、農業体験農園で近隣の地域住民の方々が利用者として活動されているので、それをきっかけに農園主自身が地域活動に参加するというところにつながっていったというような園主に対する変化も多くみられたというのが特徴としてありました。

(4)農園主調査からみた農業体験農園の役割

これまでの結果を６つにまとめています（スライド 15)。何度もいっているので省略していきますが、まず１つめは農園経営による高い収益性の確保です。1 区画でだいたい 5 万円の収入を得られますので、それで 100 区画程を運営していると、500 万円が収入として得られます。結構高い収益性が得られるというところがそれぞれの農家の方からの声として得られました。

さらに２つめに、農園経営においては、労働力が確保されます。自分が指示をして利用者の方に色んな農作業をやってもらうというところで、当然、説明の部分では若干の負担が出ますが、基本的に収穫であったり、選別であったり、荷造りといった労働は削減されるという面で、労働面の貢献がみられるということです。

３つめは、農業体験農園の経営を導入することによって、他作業に労働力を集中できたり、新しい品目を導入することができたりといった農業経営の充実化が図られているという特徴もみられました。この特徴は、収益面および労働面の貢献によって生まれた金銭的・

時間的余裕が生み出しているといえます。

４つめは、年齢的にも若い経営主や後継者が確保されているということです。50 歳代以下の経営主が 62.5%、予定を含み農家後継者ありの農園が 43.8%と高い割合を示しています。これは、先ほど説明した収益面、労働面、経営効率面でのメリットを感じ、農業体験農園を含んだ農業経営の将来ビジョンがみえることが影響していると考えられます。

５つめは、農園利用者または近隣住民に対する農業理解の促進につながっているということです。農園利用者に対する農業理解はもちろんのこと、農地が開かれていることで近隣住民への農業理解の促進にもつながります。また、園主のなかには、利用者との関わりを通じて新たな知識を得たり、自身の農業を見つめ直したり、自身の学びにもつながると感じている方もみられました。

６つめは、農園主を支える「サポーター」が育成されていることです。サポーターが存在する農園は半数を超え、農業体験農園の運営の円滑化が図られるのみならず、なかには自家農業経営においても大きく貢献している農園もみられました。

農業体験農園をやることによって利用者の方も楽しく利用ができるというところもありますが、農園主が経営している農業経営のほうにも非常に大きく貢献しているということが農園主に対する調査から明らかになりました。

３ 利用者調査からみる農業体験農園の果たす役割

次に利用者調査、利用者サイドはどういった「農業体験農園の効果」を感じているのかをまとめたものがこちらになります。

（1）農園利用者の個人属性

こちらは属性の部分をまとめたのです（スライド 16）。年齢階層は 50 代から 60 代の方が中心になりますが、40 歳未満の方がいたり、80 歳以上の方が利用されていたりというように、幅広い年齢層の方が利用されています。利用年数をみていただくと、1 年目、初心者の方が 12%ですので、約 9 割近くの方がリピーターで、リピート利用されている方が非常に多くみられるというのも練馬の農業体験農園の特徴ととらえています。

最近の流れとしましては、利用主体をみていただくと、家族で利用しているというのが圧倒的に多いのですが、最近グループ利用が増えています。1 家族で 1 区画というわけではなく、２つの家族が合同で１つの区画を使うといった取り組みもみられるというのが最近の特徴になっています。

（2）利用目的

アンケート項目について、どういった目的で利用されているのかというのをみると、や

はり「作物を作る楽しみ」、「その工程というものを経験したい」というところが利用目的の１番多数を占めていました（スライド 17)。また、これを年齢階層的にみると、60 歳以上の方は作物を作るといった部分よりも、どちらかというと「充実した余暇活動を楽しみたい」であったり、「運動不足の解消に使いたい」という意見であったり、または。「農家や他の利用者との交流を図りたい」という部分が多くみられました。子育て層、40 代未満の方の場合ですと、回答数としては少ないのですが、「子どもの成長」を目的に農業体験農園を活用しようと思っていますという意見がみられました。

（3）利用してよかった点

そういった利用目的を持ちながら実際に利用してみて「どういう点が良かったですか」ということを聞いた項目をまとめたものがこちらです（スライド 18)。

利用目的の上位にあった「農産物を作る楽しみ」であったり、「おいしい野菜を手に入れる」であったり、「新鮮で安心・安全な農産物を自分の手で作る」というところが１番の魅力になっていますが、これも利用はじめの段階と、リピート利用していく方によって若干変わってきているというのが特徴としてあげられました。

利用し始めた頃ですと、「農業技術が得られた」だとか、「農業に対して色々理解が深まりました」というのを良かった点にあげているのですが、継続利用していくと、「農家と利用者同士で交流できる」というところを非常にメリットとして考えられていたり、「ネットワークが新しくできる」というところをメリットとして感じている方が多くみられたという結果が得られました。

（4）都市農村交流への関心

さらにみていきます（スライド 19)。農業体験農園を除く他の都市農村交流、直売所とか、収穫体験農園、農家レストラン、農家民宿・農家民泊、農村ワーキングホリデーに対する関心を聞きますと、農産物直売所、収穫体験農園といったところは都市地域に多くありますので、「利用したことがある」というのが非常に多くみられました。

また、農業体験農園の取り組みをきっかけとして、その後、農村部での宿泊を伴った色んな体験活動に関しても「利用してみたい」という方が 30％程度みられたり、「関心があるのみ」といった関心がある層も含めると、全体でみて７割近くの利用者の方がこういったところまで関心を持っているということが特徴としてみられました。つまり、農業体験農園の利用者は、栽培・収穫といった農作業に対するニーズだけでなく、農家との交流といったニーズも高いといえます。

（5）農園利用による意識･生活の変化

農園を利用したことによる意識・生活の変化についても、以下の表にまとめています（ス

ライド 20)。「そう思う」、「多少はそう思う」と回答した割合が 90%以上のものを赤、80%以上のものを黄、70%以上のものを青で示しています。総じて意識・生活の変化が起こっているといえます。

基本的には女性の方が生活の変化を感じているという特徴があります。また、利用当初は「農業に対する理解とか関心が深まりました」というところが中心であったのですが、継続して利用することによって、自身の食事や食生活の変化にまでつながっているということが調査結果から明らかになりました。

(6)都市農業の意義・役割

「都市農業の意義・役割」につきましても、こういった調査結果が得られています（スライド 21)。こちらは 2010 年度に農林水産省の消費者モニター調査でも同様の項目で調査が行われていたのですが、そこで聞かれた項目の回答よりも高い割合の方から、「大いに果たしている」、「ある程度果たしている」といった回答を得ています。こうしたことから、農業体験農園を利用することによって、都市農業の様々な機能や役割の理解にもつながっていくということが結果として得られました。

(7)地域住民とのつきあいの変化

また、最後に地域住民とのつきあいの変化について聞いた項目がこちらになっています（スライド 22)。つきあいの変化がみられたのが約半数の割合になっていますが、そのなかでも「農産物のおすそわけ」とか、「日常的に立ち話をする」というところが変化としてみられていました。つまり、農業体験農園が地域におけるコミュニケーションツールとして機能しているともいえます。また、町内会などの地域活動に積極的に参加するようになった利用者もみられ、農園での人との関わりが地域住民との関わりを見直すきっかけになるのではないかと考えられます。

(8)利用者調査からみた農業体験農園の役割

これまで話した内容をまとめて５点に集約しています（スライド 23)。

まず１つめは、高い農園リピート率と農園への愛着があるということです。これには、定期的な講習会の実施と様々な行事の実施など「反復型」の交流が影響しているといえます。

２つめは、幅広い年代層や初心者から経験者まで様々なニーズに応える取り組みになっているという点です。農業体験農園は都市においても貴重な世代間交流の場・コミュニティ形成の場として機能しています。

３つめは、食生活の見直しなど「食」に対する意識の変化をもたらす点です。利用当初は農業理解が進むのですが、継続利用することで食意識の変化にまでつながります。まさ

に、食農理解の場としての役割といえます。

４つめは、都市農業の機能とか役割の理解にもつながっていることです。都市農業の有する多面的機能への理解がもたらされ、農業体験農園は都市農業に対する市民理解醸成の場としても効果を発揮します。

さらに５つめには、地域住民との関係性の変化が生まれている、つまり、都市において希薄化しているといわれているコミュニティの再構築に貢献する可能性を持っているといえます。これらの結果が利用者調査から得られました。

4 農業体験農園の今後の展開可能性

最後に、これらの調査結果を全て踏まえまして、今後、どのような展開の可能性があるのかといいますと、これまでは都市中心に農業体験農園は拡がってきたのですが、中山間地域であっても十分に拡大する可能性があるのではないかということです（スライド 24）。

農園主の調査のなかでは、高い収益性や労働力の確保、それらによる農業経営の充実、農業経営の将来ビジョンがはっきりみえることによる後継者確保や新たな担い手の育成がなされているという結果が得られましたし、また、利用者調査をみても、世代間交流や農業理解の場、新たなコミュニティ形成の場やコミュニティ再構築への可能性を有していることがわかりました。このように、農業体験農園の果たす役割は非常に多くあるのですが、これらそれぞれが都市地域だけに限った課題ではなくて、中山間地域、農村地域のほうでも同様の課題があります。そういった地域においても展開の可能性を有しているのではないかと結果から考察しました。

以上で、とても駆け足になりましたが報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

付属資料

報告構成

【報告構成】

1．農業体験農園の仕組み
（1）農業体験農園とは
（2）東京都練馬区の農業概要と農園事業の展開

2．農園主調査からみる農業体験農園の果たす役割
（1）東京都練馬区における農業体験農園の運営状況
（2）ヒアリング調査結果からみる農業体験農園の役割

3．利用者調査からみる農業体験農園の果たす役割
（1）アンケート調査結果からみる農業体験農園の役割

4．農業体験農園の今後の展開可能性

報告構成　2

1. 農業体験農園の仕組み

【農業体験農園とは】

・整然と広がる農園の風景

⇒年間で約30品目ほどの野菜を栽培・収穫体験できる

1. 農業体験農園の仕組み

【農業体験農園とは】

・農業体験農園に使用する資材

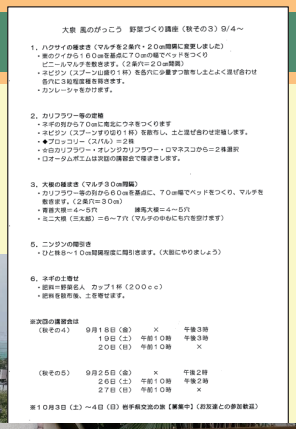
⇒農作業に必要な種苗、農具、肥料等は農家が全て準備を行う。

1. 農業体験農園の仕組み

【農業体験農園とは】

・農業体験農園の基本・講習会の風景

⇒作業を行う品目ごとに丁寧に説明。



大宮 風のがっこう　野菜づくり講座（秋その3）9/4～

1，ハクサイの植まき（マルチを2条穴・20cm間隔に変更しました）
・畝のクイから160cmを基点に70cmの幅でベッドをつくり
ビニールマルチを敷きます。（2条穴=20cm間隔）
・ネビジン（スプーン山盛り1杯）を各穴に少量ずつ散布しよとよく混ぜ合わせ
各穴に3粒程度種を蒔きます。
・カンレーシャをかけます。

2，カリフラワー等の定植
・ネギの刈から70cmに電光にウネをつくります
・ネビジン（スプーンすりきり1杯）を散布し、土と混ぜ合わせ定植します。
・◆ブロッコリー（スバル）＝2株
・☆白カリフラワー・オレンジカリフラワー・ロマネスコから＝2株選択
・ロオータムポエムは苗の間隔広で植えます。

3，大根の種まき（マルチ30cm間隔）
・カリフラワー等の刈から60cmを基点に、70cm幅でベッドをつくり、マルチを
敷きます。（2条穴=30cm）
・青首大根＝4～5穴　　練馬大根＝4～5穴
・北二大根（三太郎）＝6～7穴（マルチの中心に6穴を空けます）

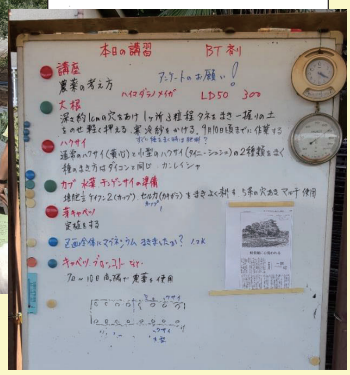
5，ニンジンの間引き
・ひと株8～10cm間隔程度に間引きます。（大胆にやりましょう）

6，ネギの土寄せ
・肥料＝野菜名人　カップ1杯（200cc）
・肥料を株間に、土を寄せます。

※次回の講習会は
（秋その4）　9月18日（金）　×　午後3時
19日（土）　午前10時　午後3時
20日（日）　午前10時　×

（秋その5）　9月25日（金）　×　午後2時
26日（土）　午前10時　午後2時
27日（日）　午前10時　×

※10月3日（土）～4日（日）岩手県交流の旅【募集中】（お友達との参加歓迎）



1. 農業体験農園の仕組み

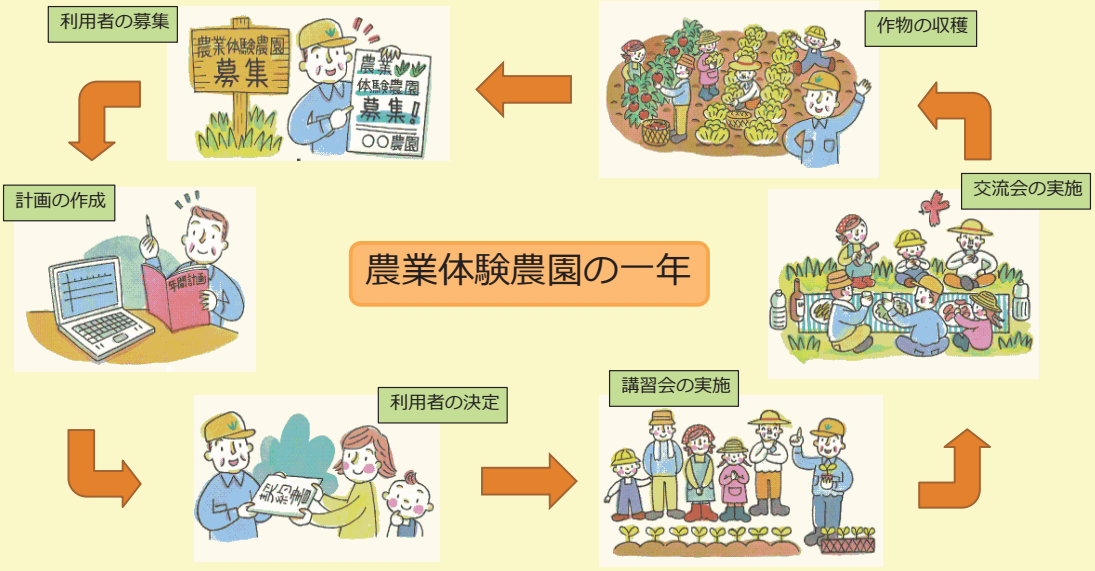
【農業体験農園とは】

・農園利用者間の交流会

⇒交流会は「人と人を繋ぐ架け橋」。
新たなコミュニティが生まれる。
農園の管理も円滑に。

1. 農業体験農園の仕組み

【農業体験農園の一年】
・園主の指導によって安全・安心な野菜が収穫できる。
・園主・利用者との交流によって、新しいコミュニティが生まれる。



1. 農業体験農園の仕組み

【市民農園と農業体験農園】
・市民農園と農業体験農園の仕組みの違い

	市民農園		農業体験農園
	特定農地貸付法	市民農園整備促進法	
開設主体	地方公共団体・農業者・JA・NPOなど		主に農業者
開設方法	貸付規程を作成し、農業委員会へ申請	整備運営計画を作成し、市町村へ申請	法的手続きは不要
開設場所	特に指定なし	市街化区域または市町村が指定した市民農園区域	特に指定なし
耕作者	農園利用者		農地所有者
生産緑地買取申請	生産緑地の指定から30年経過によるもの以外申請できない		申請できる
相続税の納税猶予	基本的には適用されない		適用実績あり
作付計画	農園利用者が自由に作成		農園主が作成
資材準備	利用者が準備		農園主が準備
栽培指導	基本的になし（年数回の場合もある）		あり
収穫物	農園利用者に帰属		園主に帰属するが、契約により利用者に帰属

資料：阪口・大江（2003）、全国農業協同組合中央会（2016）を基に報告者加除修正。

⇒農業体験農園は農業理解の促進、新たなコミュニティの醸成、担い手確保への可能性など多様な意義を有していると考えられている。

1. 農業体験農園の仕組み

【全国に拡がりつつある農業体験農園の取組】

・農業体験農園の拡がり

1996年東京都練馬区で誕生し、その取り組みは全国へと拡大。

東京都：練馬区・調布市など92農園が取組を導入。

関　東：茨城県・埼玉県など25農園。　九　州：福岡県を中心に13農園。

その他：京都府・和歌山県など12農園。 ⇒計140農園ほどが開設（H29年）。

⇒以下では、この仕組みが考案され、その取組が成熟している**東京都練馬区**を事例として、農業体験農園の果たす役割を紹介する。

全国に拡がりつつある農業体験農園の取組　9

1. 農業体験農園の仕組み

【東京都練馬区の農業概要】

①**都府県と同等あるいは上回るほどの充実した農業経営**(2015センサス)

販売農家率：66.9%（都府県：61.2%）

販売金額500万円以上農家率：15.9%（都府県：13.7%）

②**不動産収入による安定自営兼業農家が多く存在**

練馬区農業経営実態調査（2016年）

専業農家8戸・第1種兼業農家17戸・第2種兼業農家404戸

③**市場出荷型から直接販売型へのシフトと少量多品目生産に**

販売形態（1987→2016）：市場出荷462戸→73戸、朝市等11戸→104戸

作付面積上位5品目割合（1989→2016）：68.6%→37.4%

⇒**一方で、さまざまな課題にも直面**

総農家の減少率、総農家・販売農家の農地減少率は都府県より高い割合

(順に、都府県:30.8%、25.2%、26.5%、練馬区:35.6%、43.5%、43.6%)

☆農業を重要な産業として位置付け、農業体験農園をはじめ多くの取組を実践している。

東京都練馬区の農業概要　10

1. 農業体験農園の仕組み

【東京都練馬区における農園事業】

	区民農園	市民農園	農業体験農園
仕組	農家から借りた農地を区が整備し、区民に貸し出す （「市民農園」は既存の区民農園と区別するため命名）		農家が開設、管理運営を行う 農地貸借は発生しない
農地区分	宅地化農地	生産緑地	生産緑地
開設年	1973年～	1992年～	1996年～
農園数	18農園	5農園	17農園
総区画数	1,426区画	246区画	1,813区画
区画面積	約15㎡	約30㎡ 車いす利用者優先区画約20㎡	約30㎡
利用期間	原則として1年11ヵ月		約1年、最大更新5年可能
使用料	400円／1ヵ月	1,600円／1ヵ月 車いす利用者優先区画1,100円／1ヵ月	練馬区民38,000円／1年 練馬区民以外50,000円／1年
指導者	なし		農園主による指導あり
利用資格	①練馬区に住所を有する（世帯単位）、または過半数が練馬区に住所を有する方で構成されている団体 ②区が定める規則を守って農園利用できる方		20歳以上の方（グループ・複数家族による利用可）

資料：藤田（2017）、練馬区（2017b）、大江（2009）を基に報告者加除修正。

東京都練馬区における農業体験農園

地域との共生と安定した収入、労働の効率化を目指す市民参加型農業

⇒農業者・練馬区・東京都農業会議・JA東京あおばによって、1996年より展開。

①練馬区農業体験農園園主会を組織（東京都・全国においても組織化）

②地元JAの農業祭において農園区画の立毛品評会を実施

⇒個々の農業経営の発展のみならず、地域農業の発展を目指す取組。

2. 農園主調査からみる農業体験農園の果たす役割

【東京都練馬区農業体験農園の運営状況】

園主	園主年齢（歳）	地区	開設年（年）	経営耕地面積(a)		区画数	農園収入割合(%)	現在の生産・販売状況		
					農園(a)			品目		販路
								少量多品目	その他	
A	61	大泉	1996	105	80	153	76	○	柿、ブルーベリー	直売、観光
B	62	大泉	1997	140	60	140	43	○	ブルーベリー	直売、観光
C	76	練馬	1998	72	42	118	50	○	-	直売
D	56	練馬	1999	48	40	92	95	○	-	直売、給食
E	74	練馬	2001	110	30	74	30	○	-	直売
F	54	石神井	2002	100	50	160	60	○	ブルーベリー	観光、スーパー
G	53	大泉	2003	135	50	130	50	○	-	直売、スーパー
H	48	大泉	2004	110	45	119	40	○	切り花	直売
I	78	大泉	2005	230	70	113	70	○	-	直売
J	55	大泉	2006 2014	140	70	101 51	50	-	枝豆	直売
K	48	大泉	2007	70	35	82	50	○	柿	直売、スーパー
L	63	大泉	2008	50	45	100	95	○	-	給食
M	48	石神井	2009	90	40	82	66	○	キャベツ	直売、市場
N	54	大泉	2010	130	50	101	70	○	-	直売、スーパー
O	51	石神井	2011	75	40	88	50	○	-	直売
P	33	石神井	2012	100	42	109	50	○	-	直売、給食
平均	57			107	49	106	59			

資料：園主ヒアリング調査（2016年5・6月）を基に報告者作成。

2. 農園主調査からみる農業体験農園の果たす役割

【ヒアリング調査結果（農業経営面）】

園主	農業体験農園経営をはじめたきっかけ	農業経営面での魅力			後継者の有無	農業体験農園導入後の経営変化	特記事項
		収入	労働力	その他			
A	都市農業存続における市民理解の必要性 園主Bとともに仕組みを考案		○		◎	直売が主から農園経営が主に移行 後継者と共に農園を運営	先代から直売中心に移行 技術を発揮できる経営を模索
B	近隣住民の農業の理解促進 園主Aとともに仕組みを考案	○	○	○	◎	隣接の農園レストランへの食材供給	講習会における農産物の販売
C	園主A・Bからの紹介 近隣住民の農業の理解促進		○		◎	家族内で労働分担 （本人：農園、後継者：他作業）	後継者も農業体験農園経営を引き継ぐ予定
D	交流を行うことによる農業の社会的意義を感じたため		○			直売所への出荷から圃場直売へ	学校の食育事業に関わり栽培指導や給食への食材供給を行う
E	近隣住民の農業の理解促進		○		△	サポーターが農園運営を補助するため他作業に労働力を集中	
F	知り合いの農家からの紹介			○	○	ブルーベリー観光農園を導入 農園の区画数を拡大	農業体験農園利用者がブルーベリー観光農園を利用することが多い
G	市場出荷のみでは経営に不安 園主Aの農園を視察後開設			○	※	家族内で労働分担（母：直売） 農園の区画数を拡大	
H	園主A・Bからの紹介 全農地を直売は困難と感じたため		○		△	時間ができたため切り花を導入	
I	出荷労働力の削減のため		○			農園の区画数を拡大	
J	時代にあった経営であると考えたため	○	○		※	スーパーへの出荷を廃止	ベジフルサミット枝豆部門入賞経験あり
K	園主Aからの紹介	○			※	家族内で労働分担 （本人：農園、親：他作業）	
L	知り合いの農家からの紹介 市場出荷にやりにくさを感じたため			○		農園の区画数を拡大 農業体験農園が農業経営の主	
M	知り合いの農家からの紹介	○			※	農園の区画数を拡大	市場出荷の割合を減らして農園事業の拡大を模索
N	農業体験農園の仕組みが自分の農業経営に適していたため		○		△	農業体験農園が農業経営の主	果樹（ブルーベリー園）と野菜を組み合わせて農園を経営
O	知り合いの農家からの紹介 家族労働のみでは経営の持続性に不安		○			農園の区画数を拡大	相手の顔が見える経営のタイプを評価
P	園主Eからの紹介 近隣住民の農業の理解促進	○			※	市場出荷を廃止し、直売と給食に 家族内で労働分担（父：他作業）	30代の後継者が園主として農園経営

資料：園主ヒアリング調査（2016年5・6月）を基に報告者作成。
注：後継者の有無欄の記号は、◎：後継者有、農園経営も引き継ぐ予定、○：後継者有、農園経営を引き継ぐかは未定、△：就農はしていないが就農予定者有、※：園主の年齢が若く、後継者の年齢も若い（小・中学校在学中など）。

2. 農園主調査からみる農業体験農園の果たす役割

【ヒアリング調査結果（交流面）】

園主	講習回数（一月）	利用者のリピート率（%）	利用者の農園への愛着（%）	サポーターの有無	農園主催の行事	特記事項
A	10	88	94	◎	収穫祭、食事会、料理教室、ゴルフ 視察研修旅行、花火大会、防災訓練	農作業体験を通じて感動を与えられると認識。交流の意義を痛感。 5名のサポーターがおり農園のウェブサイトも運営。野菜づくりの本を出版。
B	10	91	97		収穫祭、交流会、料理教室 コンサート、視察研修旅行	農園利用者が農園に隣接する農園レストランを開業（テナント貸し）。 農地が開かれることで近隣住民への農業理解にもつながる。本を出版。
C	8～10	93	96	◎	収穫祭、花見	近隣住民に都市農業をより理解してもらうため芋掘り体験を実施するなど積極的に交流活動を行う。
D	8～10	83	98	○	収穫祭、餅つき	行事をきっかけに園内で会話が増えるなど農園で行う行事を評価。都市農業の持つ機能が重要と取組を実施し交流の必要性を認識。野菜づくりの本を出版。
E	8	63	88	◎	収穫祭、旅行	講習会や農園の作業における交流を通じて農薬に対する理解を得られると実感
F	8	89	79	○	収穫祭、ゴルフ、料理教室	年1組ペースで農村移住・新規就農する利用者あり。 園主M・O・Pの農園と区画の品評や講習会での指導方法など視察交流。
G	9	97	85	○	収穫祭、コンサート	開設当初からのリピーターが存在し、他の利用者に指導してくれる方もいる。
H	8	92	94	○	収穫祭、うどん作り体験	農園経営をすることで地域活動(PTA)にも参加。 イベントの手伝いをやってもらう利用者も存在。
I	12	94	97		収穫祭、芋掘り	開設当初からのリピーターが存在。
J	6(12)	88	91	○	収穫祭、飲み会、餅つき	2園開設しているが講習会・収穫祭などは分かれて実施。 野菜づくりのTV番組に出演。野菜づくりの本を出版。
K	8～12	90	90	○	収穫祭、練馬大根収穫体験 練馬大根漬物体験	利用者にアンケートを実施し、ニーズを把握しながら運営。
L	10	90	93	◎	収穫祭、顔合わせ会	農園のウェブサイトを農園利用者が運営。
M	9	88	96		収穫祭、バスツアー、花見	園主F・O・Pの農園と区画の品評や講習会での指導方法など視察交流。
N	9	83	93		収穫祭、交流会	農業体験農園の交流の形態に縛りがなく、園主毎に個性を出して交流を行えることを評価。
O	9	80	93		収穫祭	利用者から得られることが多く、自身の学びにつながる点を評価。 園主F・M・Pの農園と区画の品評を実施や講習会での指導方法など視察交流。
P	9	90	93		収穫祭、懇親会、BBQ	農業体験農園を通じて地域を知ってもらう効果があると実感。 園主F・M・Oの農園と区画の品評を実施や講習会での指導方法など視察交流。

資料：園主ヒアリング調査（2016年5・6月）、藤田（2017）を基に報告者作成。
注：サポーターとは、園主が不在時に指導補助、資材準備を行うなど園主をサポートする利用者を指す。中には園主が指名している農園もあり◎で表記した。

2. 農園主調査からみる農業体験農園の果たす役割

1．**農園経営による高い収益性の確保**
・農業収入に占める農業体験農園の割合が半数以上：81.3%
⇒農園経営を農業経営の主体にする農家が現れるなど収益面で貢献。

2．**農園経営による労働力の確保**
・農業体験農園を導入することの魅力が「労働力」：62.5%
⇒収穫、選別、荷造りなど出荷労働が削減され労働面で貢献。

3．**経営の効率化による農業経営の充実**
・他作業へ労働力を集中（E農園）　・新規品目を導入（H農園）
⇒収益面・労働面の貢献によって農業経営の充実化が図られる。

4．**年齢的に若い農家経営主・農家後継者の確保**
・経営主年齢50歳代以下：62.5%、農家後継者有(予定含む)：43.8%
⇒経営の将来ビジョンが見えることが後継者確保へとつながる。

5．**農園利用者・近隣住民に対する農業理解の促進**
・農地が開かれることで近隣住民の農業理解へつながる（B農園）
⇒取組を通じて園主自身の学びにつながると感じる園主もみられる。

6．**農園主を支える「サポーター」の育成**
・サポーターが存在する農園：62.5%
⇒経営面においても大きく貢献している農園もみられる。

3. 利用者調査からみる農業体験農園の果たす役割

【アンケート調査結果（属性）】

東京都練馬区農業体験農園利用者アンケート調査

全17農園、1,813区画の利用者に対してアンケート調査を実施。
⇒総回収数／1,111通（回収率：61.3%）

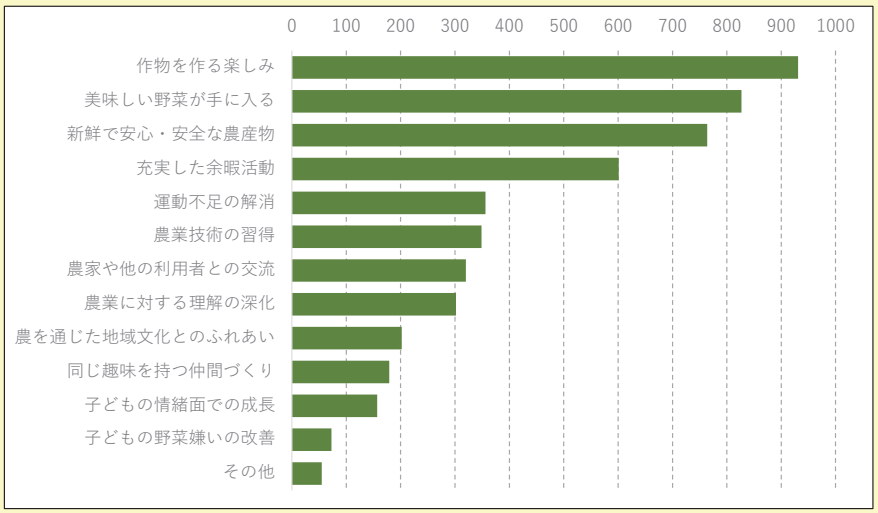
性別	男性：59.2%、女性：40.8%
年齢	40歳未満：4.7%、40歳代：17.3%、50歳代：21.1% 60歳代：33.3%、70歳代：20.7%、80歳以上：3.0%
職業	会社員：27.6%、専業主婦・主夫：16.3% パート・アルバイト：11.6%、無職・定年退職：30.1%
居住地域	練馬区内：89.4%（大泉地区：44.2%・石神井地区：32.4%・練馬地区19.5%） 練馬区外：10.6%
利用前の農との関わり	庭やベランダでの家庭菜園：31.8%・市民農園の経験：23.6% 学校での体験：5.6%・収穫体験農園：5.5%・かかわりは無い：14.1%
居住年数	5年未満：10.8%、5～10年未満：11.7%、10年以上：77.6%
利用年数	1年目：12.3%、2～5年目：41.0%、6年目以上：46.7%
利用主体	家族（単身者含む）：95.5%、グループ（複数家族含む）：4.5%
知ったきっかけ	行政の広報：64.0%、利用者からの口コミ：28.4% 農業体験農園を実際に見て：17.2%

資料：東京都練馬区農業体験農園利用者アンケート調査（2016年度）を基に作成。

3. 利用者調査からみる農業体験農園の果たす役割

【アンケート調査結果（利用目的）】

・収穫体験にとどまらない一連の農作業体験を期待。
・60歳以上層は「交流」、子育て層は「子どもの成長」。
・利用年数を重ねるごとに「交流」や「仲間づくり」を目的とする。

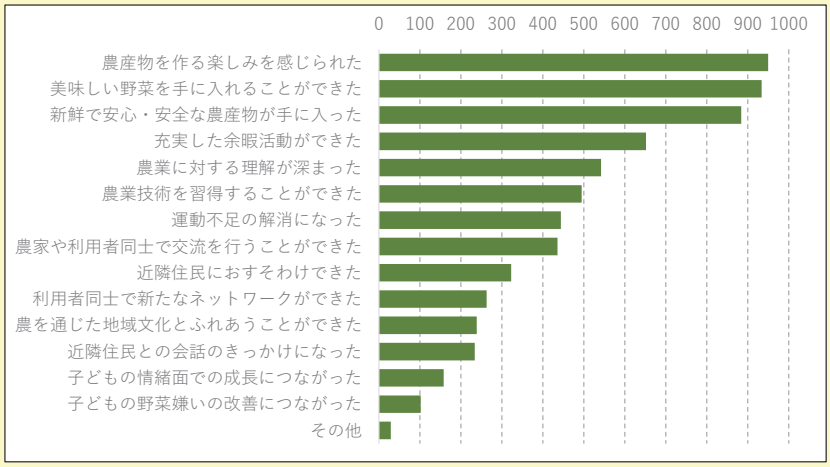


資料：東京都練馬区農業体験農園利用者アンケート調査（2016年度）を基に作成。

3. 利用者調査からみる農業体験農園の果たす役割

【アンケート調査結果（よかった点）】

・新鮮で安心・安全な美味しい野菜を自分の手で作れることが魅力。
・農業に対する理解の深化。⇒講習会による農園主の丁寧な技術指導。
・利用当初：農業技術の習得や農業に対する理解の深化。
　継続利用：農家、利用者同士の交流や新たなネットワークの形成。



資料：東京都練馬区農業体験農園利用者アンケート調査（2016年度）を基に作成。

3. 利用者調査からみる農業体験農園の果たす役割

【アンケート調査結果（都市農村交流への関心）】

・すべての取り組みに「関心がない」と回答→　7名
　⇒多くの農園利用者が何らかの都市農村交流に関心を持っている。
・農産物直売所や収穫体験農園は利用したことがある割合が高い。
　⇒比較的身近に取り組むことが出来る交流が入り口に。
・農家民宿・民泊、農村ワーキングホリデーに7割の利用者が関心あり。
　⇒栽培・収穫だけではなく、農家との交流に対するニーズが高い。

		利用したことがある	利用してみたい	関心があるのみ	関心がない
農産物直売所	(n=1,039)	82.7%	6.4%	7.1%	3.8%
収穫体験農園	(n= 968)	54.3%	17.9%	19.0%	8.8%
農家レストラン	(n= 928)	21.8%	42.1%	25.4%	10.7%
農家民宿・農家民泊	(n= 912)	3.4%	33.7%	39.4%	23.6%
農村ワーキングホリデー	(n= 907)	1.8%	23.2%	43.4%	31.6%

資料：東京都練馬区農業体験農園利用者アンケート調査（2016年度）を基に作成。

3. 利用者調査からみる農業体験農園の果たす役割

【アンケート調査結果（農園利用による意識・生活の変化）】

・多くの農園利用者が農産物・農業への関心・理解が進むと回答。
・なかでも、女性の方が生活の変化を感じている。
　⇒料理の頻度・レパートリーの増加・工夫、食品の安全性など。
・利用当初：農業に対する理解や関心の深化
　継続利用：食事や食生活の変化

		そう思う	多少はそう思う	あまり思わない	全く思わない	わからない
食卓に野菜が出る頻度が増した	(n=1,002)	75.4%	16.6%	6.1%	0.4%	1.5%
自宅で料理する頻度が増えた	(n= 986)	48.1%	26.2%	21.6%	2.4%	1.7%
料理のレパートリーが増えた	(n= 978)	37.3%	34.6%	23.6%	1.9%	2.6%
とれる野菜によって料理を工夫するようになった	(n= 998)	55.5%	33.3%	8.8%	0.4%	2.0%
家族が野菜をよく食べるようになった	(n= 986)	56.2%	28.6%	12.2%	0.9%	2.1%
食生活が健康的になった	(n= 983)	50.4%	33.1%	13.6%	0.7%	2.2%
農産物に対する関心が増した	(n= 991)	62.1%	30.9%	5.3%	0.6%	1.1%
食品の安全性などへの関心が増した	(n= 982)	50.2%	36.6%	11.3%	0.6%	1.3%
農業に対する理解が進んだ	(n= 987)	52.3%	38.5%	7.5%	0.6%	1.1%
家族や親戚と食料や農業について会話するようになった	(n= 983)	44.6%	37.0%	15.3%	1.6%	1.5%

資料：東京都練馬区農業体験農園利用者アンケート調査（2016年度）を基に作成。

3. 利用者調査からみる農業体験農園の果たす役割

【アンケート調査結果（都市農業の意義・役割）】

・多くの農園利用者がその役割を果たしていると認識。
　⇒取組を通じて直接感じられる項目は高い割合。

・2010年度農林水産省消費者モニター調査
　新鮮で安全な農産物の供給：78.7%　心やすらぐ緑地空間：64.7%
　農業への理解醸成：44.5%　農業体験・交流活動の場：40.5%
　災害時の防災空間：38.8%
　⇒都市農業の機能・役割の理解醸成に果たす役割は大きい。

		大いに果たしている	ある程度果たしている	どちらともいえない	あまり果たしていない	全く果たしていない	わからない
新鮮で安全な農産物の供給	(n=1,021)	60.6%	34.9%	3.5%	0.3%	0.2%	0.5%
心やすらぐ緑地空間	(n=1,012)	57.0%	35.9%	5.9%	0.6%	0.4%	0.2%
農業への理解の醸成	(n=1,011)	44.1%	43.8%	10.0%	1.1%	0.2%	0.8%
国土・環境の保全	(n= 995)	35.4%	37.6%	21.7%	2.2%	0.3%	2.8%
農業体験・交流活動の場	(n=1,008)	44.2%	44.3%	9.6%	1.0%	0.1%	0.7%
災害時の防災空間	(n= 999)	36.3%	33.9%	19.4%	1.8%	0.8%	7.7%

資料：東京都練馬区農業体験農園利用者アンケート調査（2016年度）を基に作成。

3. 利用者調査からみる農業体験農園の果たす役割

【アンケート調査結果（地域住民とのつきあいの変化）】

・約半数の農園利用者が地域住民とのつきあいに変化。
　⇒会話などのコミュニケーションツールとして機能。

・町内会など地域活動へ積極的に参加するようになった利用者も。
　⇒農園での人との関わりが地域住民との関わりを見直すきっかけに。

変化があった	48.1%
農産物のおすそわけをするようになった	70.8%
日常的に立ち話をするようになった	36.7%
農業に関する話を地域や職場でするようになった	26.3%
挨拶程度のつきあいをするようになった	20.2%
地域の活動（例：町内会など）に積極的に参加するようになった	14.7%
日常生活において助け合うようになった	11.6%
その他	1.0%
特に変化はない	51.9%
計	100.0%

資料：東京都練馬区農業体験農園利用者アンケート調査（2016年度）を基に作成。

3. 利用者調査からみる農業体験農園の果たす役割

1．**高い農園利用リピート率と農園への愛着**

・利用者の農園利用リピート率（全農園平均）：87.4%

・利用者の農園への愛着（全農園平均）：92.3%

⇒講習会や様々な行事の実施など「反復型」の交流が影響。

2．**幅広い年代層・初心者から経験者までのニーズにこたえる取組**

・年代：60歳以上層「交流・余暇」、子育て層「子供の成長」

・経験：利用当初「技術習得・理解」、継続者「ネットワーク形成」

⇒貴重な世代間交流の場・コミュニティ形成の場として機能。

3．**食生活の見直しなど「食」に対する意識変化**

・食卓に野菜が出る頻度増：92.0%　・農産物への関心増：93.0%

⇒農業理解から食に対する意識変化まで幅広く影響。

4．**都市農業の機能・役割の理解醸成**

・都市農業の多面的機能への理解：全ての項目で70%以上が理解

⇒都市農業に対する市民理解の醸成の場として機能。

5．**地域住民との関係性の変化を生み出す可能性**

・農園利用後つきあいに変化あり：48.1%

⇒希薄化しているコミュニティの再構築に貢献する可能性。

利用者調査からみる農業体験農園の果たす役割　23

4. 農業体験農園の今後の展開可能性

【調査結果を通じてみる農業体験農園の今後の展開可能性】

☆**都市中心に拡がりをみせる農業体験農園の全国的拡大**

【農業体験農園の果たす役割】

農園主調査結果より･･･

①高い収益性、②労働力の確保、③農業経営の充実、
④後継者確保、⑤農業理解の促進、⑥サポーターの育成　など

利用者調査結果より･･･

①世代間交流の場、②農業理解の場、③食意識の醸成
④農業の多面的機能理解、⑤コミュニティの再構築への貢献

☆農業体験農園は**農村地域においても展開可能性を有している**。

調査結果を通じてみる農業体験農園の今後の展開可能性　24

農業体験農園に対するJAわかやまの取り組み

ＪＡわかやま営農生活部
池田　信義

こんにちは、JAわかやまの池田です。よろしくお願いします。農業体験農園について「どのような経過で共同研究が始まったのか」ということを中心に話していきたいと思います。

1　JAわかやまの概要（スライド2）

まず、JAわかやまの概要ですけれども、JAわかやまは和歌山市を管内にもつJAで、全国700あるJAのなかでは中規模のJAです。農業関係の施設は少ない方です。このスライドでみますと正組合員が8,200人ですから、圧倒的多数は準組合員です。都市住民のなかで農家をされている方が一部、2%～3%いるという地域です。しかし、結構販売高がありまして、ほとんどは野菜ですけれども、JAの販売だけでも45億円となっています。和歌山市内全体ではこの倍の90億円から100億円程度の販売高があると思われます。

2　共同研究取り組みの起こり（スライド3）

和歌山大学との共同研究の起こりについてお話します。なぜ共同研究が起こったのかというと、雑談的な話になるかもしれませんが、JAの職員でもどこの企業でもそうかもしれませんが、日頃JAの職員だけとつきあっていて、土曜日も日曜日もJAの人と遊んで、何もリスクはなく楽しいわけですけれども、話が一向に発展しないわけです。特にJAの職員というのは、小学校、中学校、高校、大学がほとんど地元で、地元で生まれて地元で生活しているというような人々です。新任研修の時によくいうのですが、「JA職員というのは発想が小さいと考えておかないと大きな間違いだぞ」と。「井の中の蛙のような人間だと考えておかないと」と話して反発をくらうのですが、実際そういうわけです。

しかし、うちのJA職員のなかにも「これでJAはいいのか」、「このようなことばかりしていていいのか」、と常に疑問に感じている仲間がいまして、「もっと開かれたことを勉強していこう」という動きがありました。特に、和歌山大学さんがやっている講座、「コンソーシアム講座」とか、「ワダイノカフェ」とか、「マナビスト支援セミナー」とか。こういったことを高等教育機関の和歌山大学さんがされているのだったら、そこへ勉強に行こうということが起こってきました。そういうなかで、後に共同研究をさせていただいた藤田

先生のフォーラムもぶらくり丁商店街で「まちなかで農業は発展できるのか」ということをテーマに開催させていただきました。また、JA の営農センターで全く JA と関係のない市民を対象に家庭菜園教室を開催したりと、色々なことをやってきました。

そうしたなかで藤田先生の方からも、また、JA の役員の方からも、フォーラムではなくもっと進んで定期的なものをしたらどうかという提案がありました。最初は「共同研究ということではなく、大学の講座に参加したらどうか」という意見もありましたが、「やっぱり共同研究がいい」ということを藤田先生からご提案がありました。こちらの方は「多分、農産物直売所の研究に入るのかな」と思っていましたが、「それよりも今なら農業体験農園を研究された方がいい」といわれまして、2015 年 4 月から現在の共同研究を開始しました。

私は今、営農生活部にいるのですが、これまで営農とか、販売とかに携わってきた人間ではなく、違う分野からの人間を集めてチームを作って発足しました。そして、これは大学と一緒に実施するので、1 担当が行うというのではなく、組合長を先頭に全役員がプロジェクトチームに入って実施したことが良かったと思っています。

3　取り組みの経過（スライド 4）

それで、東京都練馬区の視察に行き、「大泉　風の学校」の白石好孝さんの講演会を和歌山大学で開催いただきました。この講演会を聞いたり、日頃の JA の宣伝を聞くなかで、農業体験農園を実際にしてみようと、特に、2016 年 1 月の白石さんの講演をきっかけに農業体験農園をやってみようという農家が生まれました。その農家は直売所で農産物を販売していた農家でしたが、その農家が手をあげてくれました。

ちょうどそれ以前から JA 近辺の病院の方から、「駐車場を駐車場だけにしておくのは面白くない。病院としても、病気になったらかかるのが病院というような発想ではいけないので、病気にならなくても来てもらえる病院を作りたい。だから JA も協力してくれないか。」というお話がありました。そこで、「病気になる前に病院に来るところだったら農業をやって楽しんだらどうですか」という提案をしました。実際、「病院に畑を作って農業体験農園をそこで始めましょう」ということで、2016 年の 4 月から取り組みました。

先程、藤井先生の発表にありました東京都の農園は 50a ほどの面積ですけれども、ここでは 400 ㎡ほどの小さな土地しかありません。それでも 16 区画の農業体験農園ができて、公募しましたところ 50 人以上の申し込み者がありました。利用料金 3 万円、4 万円も出して申し込みに来るのかと心配していましたが、意に反して、たくさんの申し込みがありましてキャンセル待ちが生じる事態ということで、とても有難かったわけです。最初の農園は 2016 年 4 月から発足し、今日では 4 園にまで増加しています。

（スライド 5）第１回研究会

これは研究会の時の写真です。藤田先生を中心に右側が JA の組合長、専務、左側が和歌山大学の先生方がいらっしゃるという形になっています。

（スライド 6）「愛菜てまりっこ」でのアンケート調査

これは JA の直売所「愛菜てまりっこ」で、大学の方で実施していただいたアンケート調査の風景です。ここで約 20%を上回る人が、「農業体験農園をするのだったら参加してみたい」という希望がありました。これもちょっと意外で、「そんなに沢山の希望があるのか」と思いましたが、この結果に力付けられました。

（スライド 7）白石好孝氏（農業体験農園「大泉風のがっこう」園主）の講演

それからこれは、先程の白石さんの講演会です。この講演会を聞いた人が「農業体験農園を導入してみよう」と思ったということです。

4 和歌山市における農業体験農園の概要（スライド 8）

これは農業体験農園の概要を示しています。現在 4 農園が生まれています。小規模ですけれども、一番大きなもので 1,600 ㎡の 30 区画、小さいところは 400 ㎡の 5 区画で、全部合わせて現在 71 区画の農園が生まれています。使用料はだいたい年間 4 万円（税別）で、1 区画の広さは、東京は 30 ㎡ですが、和歌山は 20 ㎡でやっています。

（スライド 9、10）鳴神ファーム（和歌山市鳴神）

これが鳴神ファームの写真です。住宅地のなかにありますので利用しやすく、病院の駐車場が自由に使え、車を 100 台ぐらい置けますので、車で来る人にはとても便利です。この病院にはレストランもあり、このレストランを栽培学習会で使わせていただいているので、新たに勉強するところを作らなくてもよかったし、また、トイレも使えるので、トイレも新たに作らなくてもよかったということがあります。

（スライド 11）鳴神ファーム収穫祭（2016.11.20）

これは収穫祭の風景で、藤田先生も来ていただいて、その風景が農業新聞に掲載されました。

（スライド 12）鳴神ファームの作付計画

ほとんど一般の家庭で食べられているジャガイモやインゲン、トマトなどを中心に、軟弱ものを加えて 20 品目程、春と秋に作られます。和歌山の場合は 4 園とも有機農法です。

別に有機にこだわらなくてもいいのですが、全農園主が有機農業を行っていたので「有機をやりたい」といっています。

（スライド 13、14）太田ファーム（和歌山市新中島）

太田ファームの収穫風景です。太田ファームは 20 ㎡の区画以外にフリー区画を設けていますので、そこで収穫を楽しめるようになっています。これはタマネギを収穫して、収穫したものを自由に買っていくというようにしています。

この写真は太田ファームの施設です。なかに勉強部屋とか、棚を作っています。

（スライド 15）梅原ファーム（和歌山市梅原）

梅原ファームは和歌山市の北部にあります。ここは 16 区画しかないのですが、砂地があるため大変育ちが良い状態になっています。

（スライド 16）青空ファーム（海南市小野田）

青空ファームは写真がないのですが、この 4 月に開設して現在、参加者募集中です。

5 体験農園園主の経営概要（スライド 17）

どういう人が園主になったかというと、いずれも有機農法の農家です。

鳴神ファームと太田ファームの園主は、元々農家でない方が、会社を定年後に農業を始めた人です。だから面積は小さいのです。鳴神ファームの園主は元から 20a です。

梅原ファームは元々専業農家です。3ha の大きな水田農家でしたが、米の販売が厳しくなってきましたので、農業体験農園を新たな収入源として、それを補いたいと考えたわけです。

6 体験農園利用者の実態（スライド 18）

体験農園利用者は、先程の藤井先生のお話とほとんど一緒ですけれども、様々な世帯が集まってきています。リピーター率は 81％で高いのですが、逆にいうと 2 割の方はやめていくわけです。だから常に広報し、常に宣伝をしなければ継続できないということになります。これが力を入れなければならないところだと思います。

7 開園にあたっての JA の取り組み（スライド 19）

それでは「JA は何をしたのか」ということですけれども、「JA でできることは全部しよ

う」とここに書いてあることは全部実施しました。ここに書いています苗につきましては、JA わかやまは苗を生産していますので、体験農園で使うものを幾分かは提供できます。

（スライド 20）JA 広報誌

これは JA の広報誌で宣伝したものです。市民農園と体験農園の違いや、メリットを掲載しています。

（スライド 21）「リビング和歌山」での広報（2018.6）

これはフリーペーパー「リビング和歌山」への掲載記事です。今日もトウモロコシの収穫体験を行っているのですが、リビング和歌山でもニュース和歌山でも、農業体験農園のことでは宣伝だといって掲載していただけないので、「トウモロコシ収穫体験です」といって宣伝しています。今日も午前中にトウモロコシ収穫体験をやっていますが、参加した人には農業体験農園の宣伝をする仕組みになっています。体験農園参加者の 2 割は 1 年すると更新されませんので、絶対に宣伝ということを忘れてはいけません。

8　園主に対するサポート（スライド 22）

園主に対してはできることを、栽培技術指導など色んなことをやっています。どうしても園主は栽培の方に力が入りますので、先程の藤井先生のおっしゃったコミュニティ機能というものがどうしても弱くなります。だから参加者から、もっと楽しいことをやってほしいと不満が出てきます。その意見を踏まえ、JA の方ではいかに楽しいことを提案するかということに力を入れています。

9　農業体験農園の成果（スライド 23）

農業体験農園の成果としまして 1 つめは、「農家の所得向上」です。10 a で 60 万円以上の純収益があがります。このように収益をあげられる農産物はありません。例えば、キャベツやハクサイでもそうそうあがりませんし、労働時間ががむしゃらにかかります。労働時間が少なくて 10 a で 60 万円収益があがるというのは優れた農業ではないのかと思います。ほかに高齢者対策とか、子どもの食農教育とか、色んなプラス面があると思っています。

10　今後の JA の取り組み（スライド 24）

最後のスライドですが、ここでは 3 つあげています。ここで抜けていますが、今ある農

業体験農園の強化、拡大をしておかなければいけません。今後、農業体験農園をだいたい10園位まで増やしたいのですが、次の5園目に参加を希望する人はこれをみてきますので、今ある農園を充実させておくというのが大きな目標です。

補助事業と書いていますが、昨日、和歌山市農林水産部の担当者が来まして、「和歌山市としても、これまで補助事業がなかったのですが、農業体験農園に関して予算化をしたい」といっています。今後はそういうものも活用できると思います。

どこの企業でもそうだと思うのですが、JA というのは、「ある方がいい」ぐらいの組織で、「ないと困る」、「いてくれなかったら困る」という存在にはまだまだなっていません。まだまだ、「ある方がいい」ぐらいの組織だと思います。これからは、「いてくれないと困る」、「なかったら困る」と参加者からも園主からもいわれるために、大学から教えていただき勉強しながら進めていきたいと考えています。以上です。

付属資料

農業体験農園に対する JAわかやまの取り組み

JAわかやま営農生活部
池田　信義

1

JAわかやまの概要(2018年3月末)

- 和歌山市36万都市が管内
- 組合員31,000人（正組合員8,200人）
- 販売高45億円（40億円ショウガなどの野菜、米2.3億円、果樹2.7億円）
- 貯金3,385億円、貸出金647億円
- 購買品供給高19億円
- 共済保有高4,812億円
- 職員341人
- 耕地面積2,918ha（水田2,020ha　樹園地499ha　普通畑399ha）
- 農家戸数3,615戸、農業就業人口3,577人

2

共同研究取り組みの起こり

- 2000年以降、JAが市民との交流、都市農業の振興で方策を模索
- 2013年コンソーシアムフォーラムで、JAの有志が、和歌山大学と都市農業についてフォーラムを開催
- 2014年4月市民との交流の強化として家庭菜園教室を営農センター、まちなか施設のフォルテワジマで開催
- 2015年1月、JAが和歌山大学観光学部に都市農業振興、市民との交流強化で共同研究を持ちかける
- 2015年4月、JAと和歌山大学が3年間の共同研究「農業体験農園の可能性を求める」を始める

取り組みの経過

年月	内容	備考
2015.4	農業体験農園共同研究開始（和歌山大学）	観光学部藤田研究室
2015.4	プロジェクトチーム発足	組合長、全役員、部長、担当者
2015.7	東京都練馬区視察	農家、市役所、農業体験農園協会
2015.10	JA紀の里農業体験農園視察	
2016.1	体験農園講演会「大泉風の学校」白石好孝氏	和歌山大学
2016.2	農業体験農園協会、園主、JAが相談	鳴神ファーム
2016.2	農業体験農園アンケート調査	500件中20%以上が関心
2016.4	鳴神ファーム開園	
2016.11	鳴神ファーム収穫祭	
2017.1	農業体験農園講演会、加藤義松氏	JAわかやま
2018.4	農業体験農園「太田ファーム」「鳴神ファーム」「青空ファーム」開園	

第1回研究会

JA役員も一緒に研究
会始まる

5

愛菜てまりっこ
売出し
アンケートの結果20%
以上の市民が体験農園
を希望(2016.2)

6

白石好孝氏(農業体験農園「大泉風のがっこう」園主)の講演

体験農園の素晴らしさを農家に説明

和歌山市における農業体験農園の概要

農園名	鳴神ファーム	太田ファーム	梅原ファーム	青空ファーム
所在地	和歌山市鳴神	和歌山市新中島	和歌山市梅原	海南市小野田
区画(20㎡)	16区画	30区画	20区画(16区画が作業中)	5区画
利用者数	25人	40人	30人	―
全体面積	400㎡	1,600㎡	600㎡	400㎡
利用料	36,300円(税込)	40,000円(税別)	40,000円(税別)	36,300円(税込)
施設	倉庫 駐車場、トイレはレストランと兼用 学習会はレストラン利用	ハウス、倉庫、トイレ、駐車場	ハウス、倉庫 駐車場 トイレは自宅と兼用	ハウス トイレは倉庫トイレと兼用
開設	2016年4月	2018年4月	2018年4月	2018年4月
特徴	有機農法、レストラン併設	有機農法、水田跡、客土30cm、施設充実	有機農法、砂地、大規模農家	有機農法、鳴神ファームの第2農園

鳴神ファーム（和歌山市鳴神）

鳴神ファーム全景

作業風景

9

栽培学習会

栽培状況

10

収穫祭（2016.11.20）

収穫祭農業新聞掲載

収穫野菜を調理し交流

思考力・創造力・応用力・集中力・色彩感覚を養う感覚

遊びながら学べる！

鳴神ファームの作付計画

春　作付一覧			
種	品目	品種	播種
1	ジャガイモ	男爵	3月1日
2	インゲン	いちず	4月1日
3	ダイコン	三太郎	3月1日
4	コマツナ、	丸葉コマツナ	3月1日
5	ルッコラ		3月1日
6	ミズナ	早生水菜	3月1日
7	カブ	金町コカブ	3月1日
8	ホウレンソウ	アクティブ	3月1日
9	トウモロコシ	ゴールドラッシュ	3月15日
10	エダマメ	おつな姫	4月1日
11	ゴーヤ	エラブ	5月1日
12	オクラ	グリーンソード	5月1日
13	ネギ	九条太ネギ	3月1日
14	モロヘイヤ		4月15日
苗	品目	品種	定植
1	ナス、	新黒ナス	5月1日
2	ナス、	水なす	5月1日
3	キュウリ	バテシラズ3号	5月1日
4	ミニトマト	ピンキー	5月1日
5	ミディトマト	ボルゲーデ	5月1日
6	ピーマン	エース	5月1日
7	シシトウ	ピッコロ	5月1日
8	アマナガ	サラダアマナガ	5月1日
9	レタス	チマサンチュ	3月4日
10	レタス	サラダMIXレタス	4月1日
11	レタス	サニー	4月1日
12	レタス	サラダ菜	4月1日
13	レタス	グリーンリーフ	4月1日
14	金時草		5月1日
15	ウマイナ		6月15日

秋作付予定品目一覧			
8月	品目	品種	播種
1	ジャガイモ	出島	9月1日
2	カブ	金町	1月0日
4	ホウレンソウ	アリーナ7	9月1日
5	コマツナ、	小松菜	9月1日
6	ミズナ	早生水菜	9月1日
7	ダイコン	大倉	9月15日
8	ルッコラ		9月1日
9	ニンジン	紅奏	8月15日
10	金時ニンジン		8月20日
苗			定植
1	ハクサイ		
2	キャベツ		
3	ブロッコリー		
4	カリフラワー		
5	サニー		
6	Mixレタス	ガーデンベビー	
7	リーフレタス		
8	ワケギ		

太田ファーム（和歌山市新中島）

開園式

収穫祭

共同区画での収穫体験

倉庫

作業用具、個人棚収納施設

梅原ファーム（和歌山市梅原）

圃場全景

栽培風景

15

青空ファーム（海南市小野田）

2018年4月開設
5区画、有機農業、現在募集中

16

体験農園園主の経営概要

園名	栽培形態	年齢	面積	販売形態	開始理由
鳴神ファーム	有機栽培農家	68歳	20a	野菜の直販	小規模、多品目生産、高齢となったため
太田ファーム	水稲栽培農家	61歳	40a	水稲、家庭菜園（自家用）	会社勤め定年になり、第2の人生を探求
梅原ファーム	有機栽培農家	56歳	3ha	水稲2.5ha、野菜0.5ha（直販）	米の販売高の減少、豊富な野菜栽培経験を生かす

17

体験農園利用者の実態

利用者年齢	20代～70代	50歳以上が65%以上
利用者の反響	農の楽しさを実感	こどもの教育、交流
利用者の地域	各園の近隣	60%は自転車、単車
年間行事	毎月1回以上勉強会	収穫祭（秋）、先進地視察、親睦
リピーター率	81%（鳴神ファーム）	

18

開園にあたってのJAの取り組み

- 組合員内外の人脈を通じて、開設者を掘り起こす
- 講演会の開催
- JA広報誌、ミニコミ誌での広報
- 一般新聞での広報
- 各農園への苗の提供
- 栽培指導
- 利用者募集
- 施設の相談

JA広報誌で講演会案内

お知らせ　INFORMATION

農業体験農園開設 と **生産緑地** に関する

講演会開催のお知らせ

3月13日(土) 14：30～17：00
大ホール（和歌山市栗栖642）
園開設希望者・市街化農地地主・正組合員

議所、全国農業体験農園事務局長　原　修吉氏
内容：①農業体験農園の特長について
②生産者緑地の実勢の運用、平成29年度の改正について

●農業体験農園と市民農園の違い
（一例）

	農業体験農園	市民農園
入園料	36,300 円 /1 区画	5,000 ～ 6,000 円 /1 区画
区画	20 ～ 30 ㎡	20 ～ 30 ㎡
収入	120 万円 /10a	15 万円 /10a
栽培学習会	必要に応じて園主が実施	なし
肥料、農薬、農機具	準備の必要あり（園主が用意）	なし（参加者が用意）
苗、種	準備の必要あり（園主が用意）	なし（参加者が用意）
生産緑地法	適応可	適応不可
納税猶予	適応可	適応不可
交流	収穫祭や品評会など、参加者の要望を確認しながら園主が自由に開催できるので、交流を拡大・深めることができる	拡大が難しい

●都市農業の継続に役立つ生産緑地制度

・市街化地域の農地は、宅地と同程度の税負担が課せられますが、生産緑地指定により固定資産税、相続税が優遇されます。
・生産緑地に指定されると30年間は農地として営農することが義務付けられ、農地以外の利用ができません。

＜生産緑地地区指定の要件＞
市街化地区内における、一団の農地等の面積が1000㎡以上であり、幅員4m以上の国道、県道、市道または県道に接していること。

～市街地農家の皆さま、ぜひご参加ください～　お問い合わせは、営農生活部☎473-9402　まで

リビング和歌山での広報（2018.6）

▶7月7日（土）
トウモロコシ収穫体験
　今年4月に開園した農業体験農園・梅原ファーム（和歌山市梅原）のオープン記念イベント「トウモロコシ収穫体験」が、7月7日（土）午前11時から、同園で実施。有機栽培のトウモロコシを収穫し、試食します。お土産もあります。対象は、小学生以上の子どもと保護者。定員10組（先着順）。
参加費500円（トウモロコシ、お土産代）。参加は、7月2日（月）までに下記へ。

21

園主に対するサポート活動

農業体験農園の栽培指導

コミュニティ機能の充実(収穫祭、交流会などの相談）

県市の補助事業への要望

施設の拡充のアドバイス（休憩所等の設置）

22

農業体験農園の成果

農家の所得向上(10aで60万円以上の純収益)

農家、市民、大学、JAの交流強化

地域への農業理解の促進

子どもの食農教育の強化

安全な農産物の供給

都市農地の保全

高齢者対策

23

今後のJAの取り組み

・和歌山市内で複数園の開園
・農業体験農園の広報
・行政への体験農園補助事業の要望

JAが農業者や市民になければならない存在になる

24

質疑応答

質疑応答

○岸上光克（座長：和歌山大学食農総合研究所）

引き続き質疑応答に入っていきたいと思います。机を動かしますので少々お待ち下さい。

その間に藤井さんの自己紹介があまりなかったので、自己紹介と農業体験農園や JA わかやまさんとの関係を 1 分以内でお願いします。

○藤井至（報告者：和歌山大学観光学部）

和歌山大学観光学部観光実践教育サポートオフィスで仕事をしています藤井です。出身が兵庫県の宝塚市で、全く農業とは関係のないところでずっと育ってきたのですが、和歌山大学の観光学部に進学をしてから農山村再生ゼミナールに所属をして、そこから農業についていろいろ勉強していきました。農業体験農園につきましては、JA わかやまさんと共同研究をさせていただいて勉強を始め、練馬へ何回も調査に行かせていただいて、今回の報告になりました。今後ともよろしくお願いいたします。

○岸上（座長）

それでは、お 2 人、前のほうに座っていただきます。2 人ともかなり充実した内容を短時間でご報告いただきましたので、まだまだフロアの皆様からご質問等々があろうかと思います。簡単なことでも結構です。藤井さんだったら、農業体験農園がもう少しどういう特徴があるのかということだったり、池田さんだったら、現場にいらっしゃいますので現場の農家さんの声とか、JA のご苦労とか、何でも結構ですので、フロアの方からいかがでしょうか。所属とお名前をよろしくお願いいたします。

○Aさん（質問者）

京都府立農業大学校のＡです。今日の発表ありがとうございました。私にとって農業体験農園というのは初めてだったのですが、市民農園やクラインガルテンについてはよく知っていたつもりなのですけども、非常によく分かりました。実は中身の質問ではなくて、1 番気になっていたことを教えていただきたいと思います。これは都市圏、あるいは都市型農業という枠組みのなかでは非常に良く理解できます。存立状況もよく説明していただいたと思うのですが、最後のほうで「これは都市圏のあるいは都市型農業にとどまらず、中山間にも可能性はあるのではないか」ということをちらっとおっしゃっていました。京都府立農業大学校は綾部市にありますので、非常に都市から離れたところにあるのです。北部の方の京都というのは過疎・高齢化で非常にもがいているところですが、そういう点でお聞きした時は、「これは、ひょっとしたら微かな光があるのかもしれない」と思ってお聞きしました。福岡の方では、そういう事例もあるということもおっしゃっていましたので、それも含めました、もう少しお考えとか、実態を説明していただけるとありがたいと思います。

○岸上（座長）
それではこの点について藤井さんの方から少し補足をお願いします。

○藤井（報告者）
ご意見いただきましてありがとうございます。福岡の方の中山間地域での農業体験農園というのは、耕作放棄地であったところを耕して、そこで農業体験農園を展開しています。中山間地域で実施するときの問題は、「利用者が集まるのか」ということがあげられます。実際にその耕作放棄地を復興させてやっておられる方に聞くと、「結構ニーズはある」ということでした。というのも、例えば、中山間地域のエリアでも単品目しか作っていないという方があったり、最近は非農家の方も住まわれていたりするので、そういったところで「ニーズがある」とおっしゃっていました。ですので、池田さんの方からもお話がありましたけれども、利用者を確保するためにどういう広報をするのかというところが、１つ大きなポイントだと思っています。福岡で実際に活動されている方から話を聞いても、十分に可能性はあると思っています。

○岸上（座長）
ありがとうございます。いかがでしょうか、よろしいですか。追加でご質問があればお願いします。

○Aさん（質問者）
やっぱり私にとっては、耕しに入る需要者側と、ここでは消費者ですが、現場との社会的距離が決定的なのです。特に、中山間を動いている時には。そうした時にどういうようにそのニーズは、広報といわれると非常に一般的になるのですが、具体的にどれくらいの状況だったら可能なのかというのが分かればいいと思います。

○岸上（座長）
藤井さんどうですか。分かりますか。

○藤井（報告者）
全て、例えば何件とかいうところが確実に分かっているわけではないのですけれども、大体福岡でも和歌山と同様に、少ないところだと 30 区画程で初めスタートされて、1 番多くやっているところでも 100 区画いかないぐらい、90 区画ぐらいでやっています。練馬の場合だと 160 区画とかもあったりするのですけれども、中山間でやるとなるとやはり初めは 20 区画、30 区画ぐらいの少ないところからスタートして、だんだん増やせるならば増やしていくというように活動していくのがいいと思っています。
広報に関しましては、市報や区報に載せていくというのもありますし、後は回覧板とかで開設することの周知を図っていくということをされているのを確認しています。具体的にもっとというのは把握できておりません。

○岸上（座長）

ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

○Bさん（質問者）

和歌山大学のＢです。お話ありがとうございました。藤井さんにお聞きしたいのですが。非農家の方が農業に携わる仕組みで、先ほどもおっしゃったクラインガルテンとか、市民農園とか沢山あるなかで、農業体験農園は面白い仕組みだと思いました。分からなかったのは、最初の練馬区がなぜこれを始めたのか。社会的な背景と園主の方の背景とを合わせて教えてもらえたらと思います。JA わかやまの場合だったら農家の所得向上にすごく寄与したということで、要するに儲けるための方法だったのかとか、その辺りをちょっと教えてもらいたいと思います。

○岸上（座長）

経緯ですね。

○Bさん（質問者）

はい。

○藤井（報告者）

今回配付している農園主に対するヒアリングのところの A 農園主の方と B 農園主の方が、ちょうど池田さんの報告にもありました和歌山で実際に講演をされた方々です。そのお 2 人が「都市農業を存続させていくために何が重要か」と考えた時に、「周りで暮らしている人たちに、どのように自分たちのやっている農業を理解してもらうのか、ということがとても重要だ」という問題意識がありました。直売活動も当然行ってはいたのですが、当然、直売になると自分で全部ものを作ったり、販売しなくてはなりません。1 人だけでずっとやっていると、「自分が高齢化した時にそれを続けていくのがなかなか難しくなっていくのではないか」、「都市で農業をずっと存続させていこうと思ったときに、周りに暮らしている地域住民に理解をしてもらって、都市農業に参画してもらい農業を守っていかないといけないのではないか」と考えたのです。そこで、この仕組みを考え出したというところが大きいと思います。ですので、都市で農業をやっていこうと思ったら、それこそ農薬をかけたりするときにも周りの住民の理解というものが当然必要になってきます。そういった部分を円滑に図っていくためにどうすればいいのかという時に、「実際に地域の人に農業を体験してもらったらいいのではないか」と考えたのです。実際に練馬区のなかでは「収穫体験農園」というのを実施していたのですけれども、ただ単に収穫の楽しい部分だけを知ってもらうのではなく、全部、１番初めに種を播いて、それを育てるというところからしっかり知ってもらったほうがより市民理解につながるのではないか、という問題意識から展開していったと聞いています。

○Bさん（質問者）

そうすると、所得向上よりも、農地周辺に住まわれている方との農業上のトラブルの解消であったりとか、農業への理解、そちらに主たる動機があったということですか。

○藤井（報告者）

そうです。それもありつつ、所得という面でいうと、ボランティア的にするだけでは当然経営が回っていかないので、「経営も成り立たせながら、かつ市民にも理解してもらうという策が何かないか」となった時に思いついたのが今回の農業体験農園です。

○Bさん（質問者）

それに関連してですけれども、まとめられた表には「収穫物は園主に帰属する」と書いてあったのが不思議に思ったのです。それは収穫したものの大部分は園主で、少し家庭に持って帰って食べるぐらいが利用者の権利ということですか。

○藤井（報告者）

基本的に、農業体験農園の利用料金の内訳からこういう書き方をしています。農業体験農園は5 万円を払って参加するといっていましたが、それが入園料としての部分と、もう 1 つは収穫した農産物の購入料を含めています。市民農園の場合だと区画を貸すという形にして、その貸している利用料金としてお金を取っているのですが、そうなると税制面で若干ひずみが出てくるので、税制面での相続税の納税猶予を受けながら、農業体験農園経営を行っていくために「入園料と収穫物の購入料」という形で「体験料」を徴収しています。一応、農産物は農業者のものであって、そこから買っているという形です。「収穫物は農園主に帰属する」と書いているのは、農家が作っているものを利用者に分けるという話ではありません。

○Bさん（質問者）

分かりました。ありがとうございます。

○岸上（座長）

他にいかがでしょうか。

○Cさん（質問者）

大阪産業大学のＣです。2 点、藤井さんと池田さんに 1 つずつ質問させていただきます。藤井さんの方で練馬のケースをご報告いただいたのですけれども、練馬というのは特殊だと思います。ですから、このアンケート調査から出てきた結果が一般化できるのかどうかということをひとつ伺いたい。

私は大阪の私立大学に勤めているのですけれども、我々の大学は結構学生の見学ツアーを毎年募集していまして、聞くところによると農業体験は結構、都会の大学の学生でも興味持っている

らしいのです。そういう学生もこういう取り組みに参加させていただける可能性はあるのかを池田さんにお聞きしたいと思います。バスで連れてきてせいぜい1泊2日ぐらいの短期の農園見学というか、農業体験というか。今の話ではちょっと違うような気もするのですが。学生ですからあまり農業に深い問題意識を持っていません。ただ、最初の農業を理解するためのきっかけとして現場へ連れて行って、農業というのはこのようなものだということを提言してもらうことはいいことではないかと思うのです。その辺のことについて伺いたいと思います。

○岸上（座長）

藤井さんは頭のなかを整理する時間が必要だと思いますので、池田さんの方からいかがですか。

○池田信義（報告者：JA わかやま）

可能性はあると思います。農業体験農園でも自由区画というのがありますし、見本区画もありますから、そこを使って大学生に来ていただいて1日体験していただくことは可能です。

普通の生産農家に行くとハードです。ショウガ農家でも、ニンジン農家でも、体験にはいいのですが、早朝、陽も上がらないうちから作業するという農業です。それはちょっとハードですから、体験農園だったら入門用にはいいかという気がします。可能性はあると思います。

○岸上（座長）

農業体験農園を実際に和歌山大学の学生さんは借りていますので、借りている方にお話を聞いてみます。感想でいいので話してもらえますか。実際に農業体験農園をやってみてどうですか。

○Dさん

和歌山大学観光学部のDと申します。実際に農園を借りてみて、月に2回ぐらい講習があって、そこで他の参加者の方と共に園主の講習会を聞きながら一緒に作業したり、大学で借りているので大学の友達と何人かで交流しながら作業したり、他の参加者の方々と交流したりするのはすごく楽しいです。農業理解という部分でも、季節変動だったり、作業の大変さというのはすごく勉強になりました。

○岸上（座長）

ありがとうございます。それでは藤井さんよろしくお願いします。

○藤井（報告者）

ご指摘のとおり確かに練馬というのは特殊といえば特殊です。練馬区からの色々なサポートであったり、JA 東京あおばからのサポートが非常に充実しているところであったり、東京ですので周りに、利用者になる潜在的な人数が多いという部分があるのは確かだと思います。ですが、この農業体験農園の取り組み自体の大まかな仕組みに関しては、十分に一般化できると感じています。

当然、収益、経営面で効果を出していこうとすると、利用料金をいくらに設定するのか、といった部分が出てきます。しかし、その農業体験農園の仕組みをやることによって、その交流のなかから農業理解につながるというところであったり、新しいコミュニティが生まれるというところであったり、ただ単に農業を理解してもらうというところにとどまらず、その利用者が実際に、またサポートしてくれるというところまでを考えると、そういった仕組みは都市だから、練馬だからできたというよりは、その仕組みをうまく自分たちの地域でアレンジをしながらやっていけば、十分に一般化することができると感じています。実際に和歌山でも練馬のものを完全にコピーしてやるというよりは、どちらかというと和歌山流にアレンジをしながら実施しているというところがありますので、農業体験農園の仕組みとしては、「一般化は十分に可能だ」と考えています。

○岸上（座長）

よろしいでしょうか。他にございましたらお願いします。

○Eさん（質問者）

地元の農協、JA いずみのＥです。JA わかやまの池田さんに少しお伺いします。実は JA わかやまさんには非常にお世話になっていまして、出資型法人の設立のときも JA わかやまさんで教えていただいて、「JA ファームいずみの」という子会社を持ってやらしていただいています。今回、農業体験農園をできれば平成 30 年からモデル的に実施できたらということで検討に入っているのですけれども、そのようななか、ハード面、ソフト面の条件が整ったなかでスタートするというのが基本と思っています。色々と整理した説明を聞かせていただいて、参考にさせていただきたいと思っています。園主さんは定年帰農で農業を始めたという方が 2 人おられるということですが、当然講習会をしたりとか、収穫祭をしたりとか、農業技術的な部分を結構習得してからということになるのではないかと思うのですが。その辺は JA わかやまさんが園主に対して行っている支援について具体的にあれば教えていただきたいのですが。

○岸上（座長）

池田さんお願いします。

○池田（報告者）

特に、太田ファームの方が兼業農家でありましたので、栽培技術はほとんどありません。半年間、県の就農支援センターへ行かれただけです。だから栽培経験が少ないので、JA わかやまとしても頻繁に農家に行ってサポートをしています。変な例えになりますが、高校野球の人が寝るときにバットと寝ているということがあります。そういう感じで私はやっています。この農園は自分の子どもだという感じでやっています。だから、仕事だという感じで行ったら、「何や」という感じになりますが、「子どもを育てないといけない」という気持ちでやっています。

○Eさん（質問者）

わかりました。

○岸上（座長）

いかがでしょうか。時間が迫っていますので、もうお一方お願いします。

○Fさん（質問者）

同じく地元の JA いずみののＦと申します。興味深い話、ありがとうございました。池田さんに 1 点お伺いします。

最初、どうしても自分も JA 職員ですので、園主さん、正組合員の方の話が気になりました。1 人目の方が園主になるというのを踏み切っていただいたとき、どうしても当然収入にも直結してくることですので、リスクが色々あると思うのです。例えば、うちの販売農家さんに新しい作物を「このようなものを作ったらどうでしょう」と提案する時でも、やっぱりそれが本当に収入に直結するのかどうかというリスクはその人にとって大きいものです。そういう部分で提案に対してどうしても二の足を踏んでしまうときがあると思います。そういう農家さんの不安を取り除くというか、リスクを受入れてもらったうえで新しいことに挑戦する、営農の形態そのものを変えてしまうという話だと思いますので、JA としてどのように取り組んでいったのですか。

○岸上（座長）

いかがですか。

○池田（報告者）

ちょっとずれるかもしれませんが、ターゲット的には共販出荷農家を対象にするのではなく、（そこだったらもう何百万円も収入がありますから）、直売農家や兼業農家をターゲットにしたらいいのではないかというのが 1 点です。

また、実際にされている専門家の加藤さんや白石さんを講演会に呼んで、生で聞いてもらうというのが 1 点です。その講演会までに JA のほうはターゲットを絞って掘り起こしをしていただき、生の話を聞いていただく。そして実現につなげていくというのではどうですか。

○Fさん（質問者）

分かりました。ありがとうございます。

○藤田武弘（和歌山大学観光学部）

和歌山大学の藤田です。言いだした者の責任上、最後に一言話したいと思います。

ご質問いただいたなかにあった「この農園の都市以外の地域への展開の可能性」という点についてです。実は練馬にも基本的に歩いてこられる方が沢山いらっしゃるのですが、電車を乗り継いで、相当遠いところからもおいでになる方がいます。ところが、練馬区内には駐車場はありま

せん。和歌山のめっけもん広場やその周辺でも、55%は大阪から来ていて、1 時間ぐらいかけて車で来られる方が結構いらっしゃいます。そういう方々のなかには単なる買い物だけではなくて、「もっと農業とふれ合いたい」というニーズを持ってらっしゃる方が沢山います。

福岡の中山間といっても、ご質問のあったように本当に遠いところというよりは、都市近郊の中山間的なイメージのところです。車で福岡の南ぐらいだったら 30～40 分ぐらいで来られて、駐車場に苦労せずに停めておきながら、農家との交流もして帰っていけるという、そういうタイプの農園が福岡辺りでは広がり始めています。おそらく、それは福岡に限らず全国的にも条件的には広がる可能性があると思います。これが参加する側の条件という点からみた 1 つです。

もう 1 つの動きは、近年こういった都市農村交流というのが、移住といったところにもつながっていく可能性を持っているということです。関係人口づくりになるのではないかと期待されています。そのなかで、農家民泊とか、ワーキングホリデーとか、色んな交流の手段があるのですが、実はそういったものというのは、滞在期間は長そうにみえるのですが、年間の農業の一部分しかみることができていません。ところが、この農業体験農園は 1 回 1 回が短いのですが、農業の最初から最後までを農家と一緒に歩むというストーリーがあるということで、そういう意味でリピーターの方々の農業に対する思いとか、関わり方、あるいはコミュニティに対する考え方というのが、通常の都市農村交流のスタイルに比べると変化が大きいと思います。これはもしかすると都市部でなく、中山間で都市住民を受入れて色んな交流をされている方々にとっても非常に大きなチャンスになるのではないかと思います。そのようなことが今後の展開の可能性としてはあると思っています。

○岸上（座長）

補足説明ありがとうございました。そろそろ時間となります。

この農業体験農園については、藤井さんはおそらく引き続き研究を深められると思います。JA わかやまさんとの関係で申しましても、平成 27 年、28 年、29 年と和歌山大学と共同研究を行ってきたのですが、30 年、31 年、32 年とまた引き続いて農業体験農園の共同研究を実施することとなっています。これと共に、池田さんから話があったとおり、JA 職員も JA のなかだけではなく外に出て勉強する必要があるということや、もう少し農業を消費者、市民の方に分かっていただかないといけないという意図から、和歌山大学のほうで平成 30 年度から JA わかやまの寄附講義を開講することになっています。そのような形でまた引き続きこの農業体験農園については研究を深めると共に、和歌山大学としても追い続けていきたいと思いますので、またこのような機会があればご報告をさせていただければと思います。

本日はここでひとまず終わりにしたいと思います。藤井さんと池田さんにもう一度大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。

食農総合研究所研究成果　第９号
2018年12月　発行
著作者　藤井　至、池田信義
編　集　食農総合研究所　都市農村共生研究部門
発行所　和歌山大学食農総合研究所
〒640-8510　和歌山県和歌山市栄谷930
TEL.（073）457-7126
印刷所　中和印刷紙器株式会社
〒640-8225　和歌山県和歌山市久保丁4丁目53
TEL.（073）431-4411